HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	城戸幡太郎の心理学研究とその思想圏
Author(s)	佐藤, 公治
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 117, 171-203
Issue Date	2012-12-26
DOI	10.14943/b.edu.117.171
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/51036
Type	bulletin (article)
File Information	Sato.K.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学大学院教育学研究院
紀要　第117号　2012年12月

城戸幡太郎の心理学研究とその思想圏

佐　藤　公　治*

【要旨】本論では，城戸幡太郎の心理学研究と心理学思想について，彼の心理学史研究の集大成である『心理学問題史』といくつかの著作の内容的検討から明らかにする。城戸は心理学の研究として自然科学的方法だけに依拠するのではなく，文化とその歴史的文脈の中に人間精神を位置づけていくことの必要性を論じている。そして，文化の中で人間発達は実現すると同時に，人間には文化的創造者としての役割があることを「文化的個性化」の概念として定式化する。城戸は「文化的個性化」を実現していくためのものとして教育を位置づける。城戸の心理学研究の背景には哲学的人間学，特にカントの実用的人間学の思想がある。
【キーワード】心理学史，文化的個性化，哲学的人間学，カント人間学

1．はじめに

城戸幡太郎は教育学の分野では「城戸教育学」という名称が当てはまるような独自の理論を展開してきた。そして城戸は教育学が抱えている理論的研究と学校教育の現場における実践とをいかに架橋していくべきかという根本問題にも取り組んだ研究者であった。彼は実際に大学における教育学の研究，そして教員養成の問題にも多くの提言をしてきた[1]。特に，彼が北大教育学部の講座編成に際して取った構想とその後のことについて書いた「北大教育学部の構想」(『北海教育評論』，3巻7号，1950(a)) には彼の教育学研究を巡る思想的姿勢が示されている。それは彼の教育学に寄せる「夢」であったのかもしれないが，そこには心理学者として人間精神を人間形成という営為を通して真の人間を扱える心理学を構築していきたいという強い心理学への批判と危機意識があったと言わざるをえない。彼のいくつかの論攷には教育という実践を学問研究として完成させようという問題意識と同時に，その背後には心理学者として心理学研究のあるべき姿を追究していこうとする姿勢があった。彼が北大教育学部の講座編成という具体的な問題に対して提示した教育学研究のための指針ともいうべきいわゆる「城戸構想」は教育学研究の問題として語られ，また今日の北大教育学部・教育学研究院の中でもなお論じられることがあるが，心理学者としての城戸の心理学についての問題意識とその思想については十分に論じられることはなかった。しかし，彼は明らかに心理学者であった。そして心理学を鋭く批判し続けた人であった。

この小論では心理学者としての城戸幡太郎の心理学思想を問題にする。そして彼の教育を巡る理論的・実践的研究を心理学者としての城戸という視点からみていく。ここでは主に城戸が彼の研究の後半の時期の1968年に刊行し，それまでの「心理学史」の研究の集大成になった『心理学問題史』の内容を検討することで城戸の心理学思想を検討していく。

* 北海道大学大学院教育学研究院人間発達科学分野　特任教授

２． 城戸の心理学批判：心理学史研究における「問い」

(1) 城戸の心理学史研究とその研究意図

城戸が心理学についてどのような批判精神を持っていたのかを体系に知ることが出来るいくつかの著書がある。そしてこれらの著書をどのような視点からみていくかということが逆に城戸の心理学理論を理解していくための手がかりにもなっている。城戸は心理学の研究を批判的に検討するために二つの課題を設定している。彼は『教育心理学の反省と期待』(1981)の第1章・「日本の心理学」の中の第3節「三，人間科学としての心理学」のはじめの部分で次のように述べている。「わたしは1926年に公にした『心理学の問題』において表現心理学と個性心理学と文化心理学の問題を提出した。これらは要するに人間学としての心理学として統一される心理学の研究課題であって，それを研究する方法原理を究明しようとして1936年に『心理学史』を書いてみたが，それは中途半端なものに終わり，それを補うつもりで1932年に書いた『現代心理学の主要問題』を補って，1950年に『現代心理学―その問題史的考察―』を出版した。」(47ページ)。なお，この著書は城戸の米寿を記念して，彼のこれまでの著作，論文の主要なものをまとめたものである。この「人間科学としての心理学」の論文は『現代心理学論集：阿倍三郎先生古稀記念論文集』(1968 (b)) に掲載されたものである。

この文章にみるように，城戸は彼自身の心理学の研究として，心理学が人間研究のために本来解くべき「研究課題」とは何であるかを究明しようとする課題と，心理学の研究方法の原理を検討する課題の二つを設定していた。そして城戸の「心理学史」の研究はまさに，後者の課題である，心理学はどのような方法で研究し，人間精神に迫っていくべきであるかという問いを心理学はどのように解いてきたか，その心理学的思想の歴史的検討から解こうとした。

このように，城戸にとっては，この二つの課題を解くことが彼の「城戸心理学」の完成のために密接に結びついたものであった。だから分けて論じることは実際には出来ないのだが，城戸が「心理学史」によって心理学の研究として本来あるべき方法を探っていった前提には，城戸が心理学の研究として解くべきもの，つまり前者の課題である心理学の「研究課題」の位置づけ方がある。この内容を検討していくことで城戸が心理学の研究として何を追究しようとしたのか，その理論的視点が明らかになるが，このことはこの小論の後半部分でみていくことにして，ここではまず城戸の心理学史の研究を主に『心理学問題史』によって検討する。

なお，前述の引用文でも示されているように，『心理学問題史』は城戸がそれまでに書いた都合3つの「心理学史」に関する著作の「続編」であり，また城戸独自の「心理学史」研究を総括したものである。城戸がいかにこれまでの「心理学の方法」を精算し，あるべき心理学の構築のためにどのような研究方法を持って研究を展開すべきか，その思索を続けていったかが分かるのである。

(2) 城戸の三つの心理学史研究

ここで，もう少し詳しく『心理学問題史』が出されるまでの経緯と，この著書の特徴をみておく。城戸の心理学史に関する著書を出版年順に挙げると，『現代心理学の主要問題』(1932 (a))，『心理学史 (上)』(1936 (a))，『現代心理学―その問題史的考察―』(1950(b))，そして『心理学問題史』(1968 (a)) の4つである。つまり，35年以上にわたって書き継がれ，その集大成が最後の『心理学問題史』ということである。

最初の『現代心理学の主要問題』は，城戸が約2年間のドイツ留学を終えて帰国した8年後，39歳の時に書かれたものである。この著書では，近代の心理学とその源流に位置するドイツを中心とした精神科学的心理学の研究が後に始まるヴントに代表される自然科学的心理学の形成と人間理解の方法にどのように作用していったのかが議論されている。第1編:「哲学的人間学と精神科学」では，ヴント以前の心理学である哲学的人間学と精神科学における人間研究と，そこで取られている人間精神の理論的前提になっているものをマッハの感覚主義，ベルクソンの直観主義，マックス・シェーラーの現象学，フォルケルトの形而上学，そしてディルタイの解釈学などの検討を通して論じている。そして，第2編の「精神科学と心理」では，ヴント以後の心理学研究が取り上げられている。第3編の「心理学と性格学」では，人間を自然科学的に論じるだけでなく精神科学的に論じていくためには個性の問題を扱わなければならないとして，キャッテルの精神測定学，フロイトの精神分析学，シュテルンの人格学，イエンシュの類型学などが議論されている。この『現代心理学の主要問題』の内容をここで詳細に述べることはしないでおく。この著書の内容は後に書かれた『現代心理学―その問題史的考察―』，そして『心理学問題史』にも引き継がれているので，これらの中で再度その内容を概観していく。城戸は『現代心理学の主要問題』の第1編で哲学的人間学における人間理解が心理学研究の出発点になっているものと位置づけているが，そこには心理学は人間精神を直接問題にする精神科学的発想を持つべきだという城戸の一貫した発想がある。城戸は他の多くの著書の中で自然科学の方法だけでは，精神的存在としての人間を扱うことが出来ないし，さらには人間と人間精神は歴史的存在でもあることを自覚する必要があり，そのための心理学の方法を模索していかなければならないと繰り返し述べていた。そして，城戸はこれまでの哲学的人間学や精神科学で心理学は正しく解かれたのかというと，これらはともすると人間精神を認識の学にとどまっていたり，ヘルバルトの表象力学に代表されるような抽象的・形式的な方法で人間精神を扱ってしまうような間違いもしてきたと言う。これらの研究では，意識を認識の問題として扱ってしまっており，そこでは心理学が認識論や論理学に回収されてしまっている。このように城戸は指摘する。だから城戸は第2編の自然科学的手法を使ったヴントに代表されるいわゆる科学的心理学を論じているところでは,「精神現象についての法則を発見するためには間接に自然科学的方法と同様な方法をとらなければならない」(106ページ) とも述べている。ただ，城戸はあくまでも「間接に」自然学的方法と同様のものを方法として用いるべきであって，そこに心理学独自の方法がなければならないこと，それを心理学はやってきたのだろうかというのが城戸の「問い」である。そこでは，今日の心理学でも解決されることなく存在している意識研究の不徹底さや，人間精神をめぐる主観と客観の対立といったことの「原型」がそのまま残されたままになっていることが分かる。

この『現代心理学の主要問題』の結論として書かれた「人間学としての心理学の問題」で，城戸は次のように主観と客観，自己と他者という対立を超えた新しい心理学を目指すべきだと言う。心理学が問題にしなければならないのは生きている人間が持っている意味と人間生活の目的意識であり，それは自然科学による客観的分析では明らかにならないものである。そこでは自己による主観的な世界の存在を排除することは出来ないが，同時に人間が歴史的社会的存在である以上は単に自己による主観によるだけでなく自己の主観を客観的に認識していくことが求められる。自己は歴史的社会的存在として客観的に認識されなければならない。そして，自己と他者，主観と客観とはどちらかが原因，結果となっていくものではなく，

これらが相互に条件となって規定し合う関係として存在している。そうなると心理学は自然科学的手法だけを使うのではなく，また精神科学的な方法に依存するのであってもいけない。むしろ社会科学的な方法によって人間生活における目的と意味を捉えていくことを目指した人間学として構築されていくべきである。このように城戸は言う。この「人間学としての心理学の問題」の文章は後の『現代心理学―その問題史的考察―』(1950(b)) でもそのまま使われている。

『現代心理学の主要問題』の4年後に書かれた『心理学史（上）』(1936) では，『現代心理学の主要問題』で取り上げられなかった古代，中世，そして近世までの人間精神の思想が扱われている。『心理学史（上）』は『現代哲学全集』の中の第8巻として書かれたものである。当初の計画では上下2巻の体系的な心理学史をまとめる予定であったが，上巻の部分だけで相当の分量になってしまい，下巻を引き続き書き終えるためにはさらに多くの時間を必要とするということで，全集全体の刊行のことも考慮して，上巻の部分だけで終えたものである。従って『心理学史（上）』とはなっているが，結局この本の「下巻」は書かれていない。そこでここではあえてこの本を『心理学史（上）』と表記しておく。

城戸はこの『心理学史（上）』の続編ともいえる近世以降の心理学研究を扱ったものを14年後の1950年に『現代心理学―その問題史的考察―』として出している。本のタイトルに「現代心理学」とあるように，19世紀以降の近代における精神科学的心理学，そしてヴントから始まる自然科学的心理学，そして個性と人格についての心理学が取り上げられている。このようにこの著書の内容をみていくと1932年に城戸が最初に書いた心理学史の『現代心理学の主要問題』と類似したものという印象を受けるが，実際，この1950年のものは1932年に書かれたものにその後新しく出てきた心理学の動きを追加した改訂版なのである。この改訂版では，城戸もこの書の序で述べているように，第1編にヤスパースの実存哲学が，第2編ではゲシュタルト心理学の新しい研究としてレヴィンのトポロギー心理学，そして日本の元良勇次郎の精神活動の力動論と目的意識の研究をドゥリッヒの有機体論の立場からの心理学研究と関連させて新たに書き加えられている。その他，前書の内容にいくつかの追加の説明が加えられているが，二つの内容には大きな変更はない。そして，前にも述べたように，結論の「人間学としての心理学の問題」はそのまま再掲されている。

(3)『心理学問題史』とその特異性

城戸は『現代心理学―その問題史的考察―』の18年後の1968年に『心理学問題史』を出す。城戸はそれまでに彼が書いた3つの「心理学史」の著書の不完全さを解消すべくこの『心理学問題史』を完成させている。この本の「はしがき」で城戸も，これまでに書いてきた「心理学史」の欠けていたものを補うためにこの書をまとめたと述べている。一つは1936年の『心理学史（上）』では古代から近世までの心理学を扱い，1950年の『現代心理学―その問題史的考察―』では近代の心理学研究を述べるというように，2冊の本に分断する形で扱ってしまっていること，そして第二には，『現代心理学―その問題史的考察―』では近世の時期のものが取り上げられていなかったのでその部分の完成を目指そうとしたということである。その結果，最終的には『心理学問題史』は580ページを超える大著となり，古代から近代までの心理学思想とその歴史を体系的に述べたものになっている。

『心理学問題史』の第1篇の古代の心理学，第2篇の中世の心理学は『心理学史（上』にいくら

か加除訂正を行ったもので，内容的に大きな変更はない。第3篇の「人間精神の探究―近世の心理学」，第4篇の「現代心理学への課題」の部分はこれまでのものとは全く異なった新しい内容になっている。特に第3篇のヴントの心理学誕生の前のドイツを中心とした哲学的人間学による心理学思想については，前書の『現代心理学―その問題史的考察―』では概略的に書かれていたのに比べてきわめて詳細な内容が展開されている。第3篇の第1章・「知識の反省」は近世の認識論と心理学として，ガリレイ，ベーコン，デカルトに始まり，ホッブス，スピノザ，ライプニッツ，バークレー，そしてドイツのヴォルフ，イギリスのヒューム，ロックの思想，フランスの啓蒙主義が取り上げられ，これらの人間研究が心理学研究の原型になっていることを思想的検討を通して明らかにしている。この第1章の前半の第3節までのバークレーまでの部分は『心理学史（上）』の第3篇の部分を加筆したものである。先にみたように，この『心理学史（上）』は続編として書かれるべきものであったものが刊行をみることなく中途半端な形で終わってしまったものである。だからこの『心理学史（上）』の第3篇は章としては1章・「意識の分析」だけが置かれ，しかもバークレーについても不完全な説明になっており，このあとヒュームとカントの近世心理学について考察したいという予告で文章も終わっている。『心理学問題史』の第3編では『心理学史（上）』の不完全部分を補い，さらに詳細な内容を書き継いでいったのである。この第3篇だけで，400ページ近い分量になっている。そして，『現代心理学―その問題史的考察―』では19世紀前半の心理学前史，そしてヴントから始まる自然科学的心理学について研究者毎に研究とその問題点を論じていくという記述の仕方であったのが，『心理学問題史』になるとそれぞれの時代に展開されていた研究の背景にある人間精神や心理学的思想の検討に力点を置いた記述になっている。第3篇，そして第4篇として新たに書かれたものが，この著書の最大の特徴であり，まさにこの書名の『心理学問題史』の通り，心理学前史と言われるヴント以前の近世，そして近代の哲学的心理学を源流として作り上げられていった心理学的人間観と心理学思想が批判的に検討されている。この第3篇の内容は他の心理学史の研究にはないもので，かつ最も難解な部分である。

この著書と前書の『現代心理学―その問題史的考察―』とのもう一つの違いは，前書の結論としてあった「人間学としての心理学の問題」はなくなり，「人間学」という広い立場から心理学の研究課題を問う代わりに，問題をより心理学の研究に限定する形で心理学がいかにして意味の問題を解いていくべきかという課題の提示をして締めくくっている点である。この二つの著書の結論は内容的には関連を持ちながらも異なった視点で論をまとめており，いずれも心理学の問題として重要な課題をそれぞれのところで提起しているのである。

城戸の「心理学史」研究は心理学の研究を「相対化」するためのものであった。もっと正確に言えば心理学は人間精神を正しく扱うことが出来ているか，その研究内容と研究方法があるべき方向に進んでいるのかを問い直す「批判」のための作業であった。城戸が「心理学史」として対象にしている心理学は通常の心理学という学問領域を超えて広く人間精神に関するものである。城戸は『心理学史（上）』，そして『心理学問題史』の「序説・心理学史の問題」で次のように述べている（この序説の最初の部分と『心理学史（上）』の序説はほぼ同じ内容であるが，『心理学問題史』では近代の心理学の研究についておよそ2ページ程度が追加されている）。「心理学史の問題は何が心理学の問題となり，如何にその問題が変遷したかを明らかにすると同時に，如何にその問題が解決され，また解決の方法が発展したかを考察することにある。…学問の歴史として心理学史を問題にする場合には，むしろその問題を解決する方法の発

展に研究の対象をもとめなければならぬ。それでたとい心理学という名称によって呼ばれていない学問でも，その問題とするところのものが他の心理学と呼ばれているものと同じ問題を取り扱っている場合には，それはやはり心理学の問題として考察してみなければならぬ。」(『心理学問題史』1ページ)。さらにこの後も次のように言う。「心理学の歴史はどこまでも問題となった心理学をさらに問題として，それが果たして学問の系統において独自の問題と方法を持ちうるものであるかどうかを批判してゆかなければならぬ。したがって心理学の歴史は心理学の問題史であり，また批判史である。」(同上2ページ)。だから城戸は『心理学問題史』というタイトルにしている。

ここに城戸の「心理学史」研究の特徴がある。『心理学問題史』は完全に心理学という狭い枠の中だけでは理解することを不可能にしている。だからこそ今改めて心理学研究は正しい方向に向かっているのかという反省と問い直しを私たちに迫ってくる。

心理学者による心理学史の研究，例えば今田恵から始まって，西川泰夫，そして佐藤達也らの心理学史は心理学者の歴史を扱っているだけで，彼らの研究の中で登場してくる心理学者たちがどのような人間精神についての思想を持っていたのかを議論することは稀である[2]。だから，客観的な歴史的事実を並べただけのこの種のものからは心理学研究についての反省や批判を見出すことは出来ない。

(4)『心理学問題史』における心理学批判

『心理学問題史』は心理学の告発の書であり，まさに心理学研究の「問題」史である。城戸が言うように心理学という枠を外して人間学としての心理学という視点を持つことの重要性をこの書は示している。そして，今改めて心理学研究は人間の精神を正しく論じているのかという反省と問い直しを私たちに迫ってくる。そもそも人間を理解するとはどうであらねばならないのかという本質的な「問い」を持って読むことを求めてくる。だから心理学という狭い枠の中だけでこの書を読み，理解することは不可能になっている[3]。

ここでは，約600ページというこの本の内容の全てを扱うことは出来ない。そこで第3篇の「人間精神の探究—近世の心理学」を中心にみていくことにするが，前にも述べたようにこの第3篇だけでも400ページ近いもので，これも全てを扱うことは出来ない。そこで，城戸がドイツ留学の経験を生かして書いた彼独自の心理学史研究ともなっている18世紀と19世紀のドイツ心理学とその周辺部分のことを述べている第3篇の第2章から第4章をはじめに取り上げる。この3つの章だけでも300ページの分量である。その後，第3篇の残りの章である第5章と，結論部分である第4篇の内容を中心にみていくことにする。

3．近世の人間研究と心理学研究の萌芽

ここでは，17世紀と18世紀に始まった人間精神への接近と心理学研究の始まりの中で取られていた思想を論じている城戸の第2篇・第3章:「人間の自覚」と，第3篇・第1章の「知識の反省」の内容をみていくが，この二つの章の内容の全てについても言及することは不可能なので，あくまでの筆者の視点で重要と思われる部分を取り上げていくことにする。

(1) 近世の世界認識と人間研究

城戸は心理学の中にある自然科学的方法を用いていこうとする発想と，人間精神を抽象的なものに置き換えて考えようとする傾向は17世紀から始まった理性と想像による世界認識の動きから生まれたものだと言う。そこで彼は近世の自然科学運動とそこで取られている自然と世界の把握の仕方に注目する。城戸は心理学とはまるで無縁のようなブルーノ（Bruno, G.）のモナドの概念，そしてガリレオの記号によって時間と運動を表現していこうとする考えが自然科学的方法を採用した心理学の思想の源流になっていると考える。城戸はここで面白い指摘をしている。ゲシュタルト心理学の中でも日常の場面における要求行動や子どもの活動の様態を位相幾何学のアイデアを使って分析したレヴィンのトポロギー心理学の発想はガリレオが自然現象の中にある関係を運動と座標として表現するという発想に基づいたものである。城戸はこのように行動を抽象的な座標系で表現してしまうことは時間的変化とそこで起きていることそのものが空間の問題に解消されてしまい，そこで起きていることの本質を捉えられることなく表現の方法だけが追求されることになってしまったと指摘している。この運動変化の把握とその表現の仕方こそが心理学が自然科学的方法を使ってしまうことの中にある必然性であり，人間精神を抽象的な形で扱ってしまおうとする心理学方法論の問題点の源流は17世紀の世界認識と世界表現の運動にあったのである。

この時期，「経験の学としての心理学の方法」という発想をもたらしたのはフランシス・ベーコンであり，他方で，この発想とは異なった考え方を取っていたのがドイツのカスマン（Casmann, O.）の人間学的心理学であった。カスマンの場合は人間精神を身体とは区別して論じ，心理学では人間精神にある論理性が問題の中心として位置づけられて自然科学的接近とは異なった方法が取られることになる。このカスマンに代表される人間学的心理学は城戸が言う精神科学的心理学へと発展していくことになる。この時期に既に人間理解の方法として自然科学的方法と精神科学的方法の二つがあって，今日でもこの二つが関わりを持つことなく存在し続けていること，特に自然科学的方法が心理学の基本的な方法であることに何の疑いも持たないという姿勢が既にこの時期からあったことを城戸は指摘するのである。

ベーコンと同じ時期にデカルトが登場したことも心理学の成立と強く関係している。城戸は，デカルトによって，「我思う」という思惟する活動こそが人間精神であって，神も物も意識という観念の形で存在するという説明が生まれ，ここに認識論に基づく人間理解が本格的に行われるようになったと言う。だから，城戸は「心理学が認識論の方法として発展したことはかかる観念論に基づくものであり，近世心理学の問題は観念の分析を中心として発展したといってもよい。」（『心理学問題史』186ページ）と指摘している。もう一つ，デカルトがその後の精神科学の研究に与えた影響として，観念を数学，特に幾何学的形態として扱うことが出来るとした点である。ここでも抽象的な記号表現で人間精神を扱おうとする合理主義の発想が出されることになる。このように認識的分析を心理学，つまり人間精神の本質にあるものと考える発想はこの後のドイツの人間学的心理学へとつながっていく。観念論的心理学の基礎をこれらが作ったのである。そして良くも悪くも草創期における心理学を方向づけていくことになった。

もちろん，この時代，デカルト的な合理主義的な発想だけが人間精神をめぐって出されていた訳ではない。デカルトと敵対したパスカルは人間の意識や思惟を認識論だけで論じることは出来ず，感情といった側面を無視してしまっては人間存在そのものを語ることは出来な

いとも言っていた。だが，人間精神についての合理主義的発想は後のホッブスの考え方へとつながっていくと城戸は言う。もう一方で，城戸はこのようなホッブスとは異なった人間精神へのアプローチを行い，心身の発生は意志による発現，つまり心身の決定因は人間の意志によるものであるとしたスピノザに注目をする。そして，城戸は，認識もこの意志という精神活動の産物，様態であると考えたスピノザの発想は，人間の精神的活動から切り離して認識そのものの存在から説明を始めてしまう考えとは異なっていること，認識を様態としてみるところに心理学の対象となりうる問題があると指摘している。城戸が重視する人間精神の発動としての意志とここでつながっていると言えるだろう。スピノザをこのように考える視点は重要である。そして，城戸はゲシュタルト心理学が想定したゲシュタルト的秩序を生み出す人間精神の「ゲシュタルト的傾向」とスピノザが言う認識を作り出す意志との比較論議は興味ある問題だとも言う。ゲシュタルト的体制化については，この後，現象学者メルロ＝ポンティによって人間精神の根源にある人間的秩序として位置づけられたこと（メルロ＝ポンティ1942,『行動の構造』）を考えると，城戸のスピノザの解釈とその評価は重要である。

(2) 経験論と合理論

城戸は第3篇第1章・「知識の反省」の後半部分では，認識の形成の問題に筆を進め，ロックの経験論と大陸合理論の間の論争を取り上げている（第3節・「知識論と心理学」）。これはまさに人間精神をめぐる心理学的論争の出発にある問題でもあった。この節の城戸の記述で重要なのはロックが本有観念を否定したことと，事物の性質（一次的性質）と結びついた経験（二次的性質）が観念を作るとしたことに対して，対立する意見を出したライプニッツとバークレーが登場したことである。特に，ライプニッツについては心理学の歴史の中では十分に位置づけられていないが，城戸が指摘している内容をみていくと，後の心理学の思想に大きな影響を与えていたことが分かる。ロックが理性は単に経験によって後天的に獲得されるとしたことに対して，ライプニッツは経験に統一を与えていく理性は先天的に与えられているとしたのは有名なことであるが，これが今日の心理学でも登場してくるライプニッツがロックの考えを「白い板（tabula rasa）」と呼んで批判したものである。だが，この後の心理学や人間精神を考えていく時に重要な意味を持っているのはライプニッツの理性の先天性の主張の方ではなく，彼の「単子論」の考えである。ライプニッツの「モナド」は，外界から影響を受けないで，内部の中で起きる分化生成とその発展を考えるものであり，それが先のロックの経験論批判の根拠になっていたものである。ライプニッツの「モナド」は精神の内在性であり，またこの無数のモナドの相互連関，いわばシステム連関として宇宙と人間精神の小宇宙を捉えたものであるが，これらのいわばモナド連関によって一つの形が表れる，つまり表現することでその実態が表れてくると考えた。その時，生成の過程で起きていることは未だないものをあるものにしていくという微分の世界であり，またそこから普遍数学による形式的方法と微積分学の方法で人間精神を捉えるというライプニッツの方法論が出てくる。城戸はこの発想は後の心理学の方法へと継承されていったと言う。つまり，「形而上学と数学の方法によって基礎づけられたヘルバルトの心理学はこの思想から発展したものであり」（『心理学問題史』211ページ），「ライプニッツの微積分学はフェヒネルの精神物理学に適用され，位相解析はレヴィンの座標心理学や位相心理学の方法として発展させられた」（同上ページ）のである。

さらに，このライプニッツの形而上学はその後，ドイツのヴォルフ（Wolff, C.）の心理学へと

受け継がれていく。ヴォルフの心理学についてはこの後のところでみていくことにして，城戸が指摘していないことで，ライプニッツの思想が心理学，あるいは人間精神を考える思想に影響を与えていったことを言及しておく必要がある。それはライプニッツの内在主義で，これがスピノザの思想とも呼応しながら，二人の思想はドゥルーズの哲学へとつながっていったのである。ドゥルーズの『差異と反復』(1968(a))に典型的に表れているように，彼の思想はライニッツの「窓のないモナド」ではなく，絶えず外部と接触していくことによって生まれる内在的生成，それは限りなく新しいものを生み出していく微少な生成としての「差異」である。そして，この個別性がまた普遍性を形成していくための基礎単位であることを述べたものであり，まさに新しいライプニッツ論である。そもそもドゥルーズの『差異と反復』は彼の学位論文であり，副論文として一緒に提出されたのは『スピノザと表現の問題』(1968(b))である。ヴィゴツキーの思想の中にもライプニッツに由来するシステム論的発想と微分的分析の痕跡がある。ヴィゴツキーの「心理システム論」や人間精神の発生を「微視的に分析」するという発想はライプニッツ―スピノザの系列につながるものである[4]。

城戸は，ロックとライプニッツを論じている中で，ロックの経験論とその前提になっている一次的性質としての物質を批判したバークレーについても短い評論をしている。バークレーはロックが一次的性質を物質としたことを批判し，それは人間の感覚であり，知覚であること，この微小知覚こそが観念の最小単位であるとした。そして，ライプニッツと同じように，観念はこの微小単位であるもの同士の結合によって成り立っていること，その関係は自然の法則によるとした。この考えも心理学を自然科学的発想で考えていくヴントの感覚主義と要素主義，そして精神物理学へとつながっていったことは承知の通りである。

(3) 18世紀のドイツ心理学とその源流としてのヴォルフの心理学

城戸の第3篇第1章の第4節:「本体論と心理学」では，主にライプニッツの形而上学を基礎にしたドイツ心理学がヴォルフによって作られていった経緯を取り上げている。ライプニッツの形而上学はここでは人間の認識と知識を問題にする心理学へとなっていった。ヴォルフは理性あるいは理論によって経験や実践は意味づけられていくことで人間精神が作られること，そして「世界を実現するのは表象力であり，これが精神の本質」(『心理学問題史』221ページ)であると位置づけた。城戸の記述によればヴォルフは理性と経験の関係について『経験心理学』(1732年)と『理性心理学』(1734年)の中では経験と理性は別な説明原理が必要ではあるが，最終的には経験的なものは理性的なものによって説明出来ることが強調されている。そして城戸はこのヴォルフの心理学に対して次のようにコメントしている。ヴォルフは精神の表象力でもって認識の能力を説明しようとしているために，「形而上学または認識論と心理学との区別はつかず，経験と理性との統一よりも，むしろ錯綜があるので，心理学はやはり独自の科学とはなり得ないで形而上学の埒内をさまようことになるのである。しかし，18世紀の心理学は人間を形而上学の呪縛から解放して人間を人間自らの生活と歴史において自覚させようとする新しい原理と方法の発見に多様な活動を始めたようである。」(同上223ページ)。実はこの文章の最後で城戸が「人間を人間自らの生活と歴史において自覚させようとする新しい原理と方法の発見に多様な活動を始めたようだ」と述べていることは城戸が心理学の目指すべきものとしていた目標そのものであり，現実にはこのような心理学にはならなかったのである。

城戸がこの『心理学問題史』の中で一貫して問題にしていたことは，心理学が形而上学から解放されていく時，そこでどのような研究方法が取られたのか，その接近方法がはたして人間精神を正しく捉える方向へと向かったのかという「問い」であった。この後のところでも城戸はドイツを中心とした18世紀の形而上学的心理学とそれを超えようとした心理学がまさに形而上学的発想を超えようとしたがために人間精神への接近として多くの課題を抱えることになっていったと言う。

ここで，ヴォルフについて少し補足をしておく必要がある。城戸のヴォルフについての説明は概略，上でみてきたようなものである。城戸の記述を読む限りヴォルフの心理学はライプニッツ流の形式主義的発想を取ったという印象をぬぐえない。だが，ヴォルフの心理学，特に「経験心理学」には「理性心理学」との相互補完的位置づけが与えられていたのである。このあたりの事情を含めてヴォルフの心理学，あるいは哲学上の意義を論じているのが小田部（2007）の「ヴォルフとドイツ啓蒙主義の暁」の論文である。小田部は「心理学（psychologia）」という語がそれまで用いられていたpneumaticaないしはpneumatologiaに変わって使われ始めたのは17世紀からであるが，この新しい語が人口に膾炙するきっかけをつくったのはヴォルフの「経験的心理学（psychologia empirica）」と「合理的心理学（psychologia rationalis）」を通してであったという（小田部は城戸が表記した「経験心理学」と「理性心理学」をそれぞれ「経験的心理学」と「合理的心理学」として表している。以下，小田部が述べている部分では彼の表記に従う）。そして，小田部は「経験的心理学」と「合理的心理学」の関係について城戸とは幾分異なった説明をしている。「経験的心理学」では，経験を通して人が心において生じた事柄を知ることが出来，それを「合理的心理学」の知性的な仕方で説明するというように，「合理的心理学」のための根拠を与える役割を果たしている。さらに「経験的心理学」には経験的事実だけでは裏付けられていない理論を確証する方法として実験が位置づけられてもいた。あるいは，「経験的心理学」では心の存在を経験的に論じるために感覚，想像力，記憶から始まって注意と反省，知性といったように認識能力を下位と上位に分け，さらにそれらの総体として知性を想定している。このようにヴォルフの心理学には認識能力，あるいは知性を体系的に論じる心理学があった。そして，最終的には「経験的心理学」を論理学の力による「合理的心理学」によって理性的，知的に説明を下すことになるのだが，ヴォルフは経験によって得られたものや観察可能なものの存在があるからそれらに対して理性的判断を下していくことが出来るのであって，「合理的心理学」だけが単独で存在することないと考えたのである。「経験的心理学」は「合理的心理学」に先立って存在しているということなのである。要するに，理論先行ではなく，観察の理論負荷性が存在すること，観察データの重要性とそれを理論づけるものの両方が不可欠であるというきわめて常識的な考え方を取っていたのである。ただ，ヴォルフの研究には問題がない訳ではない。この後にみるカントが批判しているように，感性的なものから知性的なものの区別は単に論理的に行われているだけで，そこには形而上学的研究故の大きな制限があったのである。カントはこれを超えようとした。だからこの後もヴォルフの研究については「合理的心理学」と形而上学的発想の側面だけが強調されて伝えられるようになっていったのである。

小田部がヴォルフについて述べていることで，城戸が言及していないもう一つのものにヴォルフ学派の美学研究がある。ヴォルフの「経験的心理学」では，人間の感覚，想像力，創作力を下位の認識能力とし，「合理的心理学」で強調される知性も決して感覚や想像力といった

下位の認識から自由ではないこと，経験から得られる感覚，想像に依存していることが強調されていた。この下位能力を導いていくこと，つまり感性的認識を形にし，その完全性を目指すのが美的活動であり，美学であるという主張が出てくる。これがバウムガルテンの美学理論の出発にある考え方で，ヴォルフ学派の美学と言われているものである。小田部（2001）によると，ヴォルフ学派の美学の前提には自然が芸術に規則を与えているという考えがあり，この自然の規範性に依拠しながら芸術家は神が作った自然の創造を超えることはないが，神の創造と類比されるような創造的活動をすることに芸術創造の価値を見出すことが出来ると考えた。ここにはヴォルフの「経験的心理学」の発想と，さらにはライプニッツが主張している神が最善の世界を創造したという考えが背景にある。その後，ヴォルフ学派の美学は神への依存を幾分弱めて芸術家の構造力で創造性を説明しようとするカントの美学に取って代わられることになるが，ヴォルフの「経験的心理学」はいくつかの分野に影響を与えた考えであったし，心理学の出発にこのような思想があったことはもっと注目しておいてもよいだろう。ヴォルフについては今日の心理学では取り上げられることはない。

４．18世紀と19世紀初頭のドイツにおける心理学研究

ここからは，城戸の第3篇・第2章「意識の解明」と，第3章「人間の理解」を扱う。この二つの章が城戸の『心理学問題史』の最もユニーク，かつ重要な部分を成しているところである。ここでは，心理学成立の背景にある思想をドイツの様々な思想的流れを詳細に紹介し，その思想的背景をもとにしてどのような心理学が生まれていったのか，さらには心理学の草創期から抱えていた心理学研究の問題点を解き明かしている。城戸のドイツ留学の経験が遺憾なく発揮されているが，心理学以外の哲学思想が多く書かれていることもあり，理解は必ずしも容易ではない。さらに，この二つの章だけで250ページの分量でこの本全体の3分の1を占めている。ここでも大部な内容を全て扱うことは出来ないので，筆者なりの選択をしていることを断っておく。

(1) 人間心理への形而上学接近とその克服：ヴォルフとカントの心理学

第2章の「意識の解明」では，18世紀後期のドイツの人間精神への新しい動きが扱われている。はじめは，前のところで述べてきたヴォルフの「理性心理学」と「経験心理学」，特に，「理性心理学」を継承するか，それとも形而上学的色彩の強いこの「理性心理学」ではなく，後者の「経験心理学」を継承していくかということで，異なった二つの動きが出てくる。城戸はいわば「理性心理学」継承派と「経験心理学」重視派の二つに属する研究者について多数取り上げながら，そこでの人間理解を巡る論争を詳しくみている。しかし，ここで上げられている研究者は今日では言及されることがないドイツの思想家たちであり（例えば，ビルフィンゲル，チューミヒ，ウィンクレル，バウメル，ルューディゲル，ミレル，ホルマン，クロイツなど），詳しい内容は理解出来ない。ただ，ヴォルフ心理学の影響はドイツでは大きく，そこでの心理学研究は形而上学的研究と経験主義的方法によるものとが渾然となった形で続いていたことと，もう一つの動きはヴォルフの「経験心理学」の発想を継承していく中で人間精神を

科学的に研究するという経験主義的発想を持った研究（先に名前をあげたホルマン，クロイツ，マイエルなど）が出てきたことが確認出来る。ここに与ったのが生理学的研究である。そこでは感覚表象をあくまでも感覚器官によって説明しようというダリースやプルーケなどが出てきているし，ドイツでは，ここから心理学は形而上学から独立した科学となっていったと城戸は指摘する（『心理学問題史』258ページ）。そこにはストゥルフやダルハム，クルューゲルといった医学の分野から人間精神を科学的に論じる動きなどがあった。ここでも登場してくる研究者もほとんど今日では取り上げられることがないので残念ながら城戸の説明からその概要を知るだけである。いずれにしても，この18世紀後期のドイツの心理学の状況は，「自然学として実験的観察をも重視するようになったが，精神の本質についてはなお形而上学から離脱することができない」（同上261ページ）でいたというのが結論である。あるいは精神の問題を認識の問題として論じる傾向がある中では心理学は経験哲学の一部であり，たとえ実験的観察や経験主義的方法が取られたとしても経験科学として独立したものとはなり得なかったのである。ただ，この時期にもう一つ付け加えておかなければならないのは，ランベルト，テンテースの現象学的接近があったということである。城戸も内部経験の現象学的観察によって人間精神の基本能力を分析するというテンテースの研究は心理学史に果たした役割としては大きいものがあると指摘している（同上264ページ）。

この後，心理学が人間精神への経験主義的接近によって独自の科学になり得るのか，あるいは心理学は哲学の方法を担う下位の学問でしかないのかという問題への一つの答えがカントによって出されることになる。あるいはカントは心理学が人間精神，特に認識の解明に心理学はどのような役割を持ち得るのか，持ち得るとしたらどのような心理学研究であるべきかを論じていた。カントが心理学研究としてまず想定し，そこから心理学は脱していくべきだと主張した時に対象にしたのはヴォルフの「理性心理学」と「経験心理学」である。カントは『純粋理性批判』（1787）の冒頭の第2版序文で，形而上学を体系化し，概念の明瞭化，諸原理を法則として確立したヴォルフの研究の批判とその克服から始めなければならないと言い，ヴォルフの形而上学を独断論として批判している。『純粋理性批判』ではカントは何度もヴォルフが「理性心理学」で問題にしている知性とは何なのか，「経験心理学」で言う上級認識能力，そして下級認識能力との関係，さらには「理性心理学」とはどのような関連になっているのかが分析的に明らかにされないまま，ヴォルフ流の独断で説明されてしまっていると批判する。そして『純粋理性批判』の最後の結論部分では，認識の体系化を目指すためにはヴォルフの独断論的，ヒュームの懐疑論的なものを批判していく先に途が開けてくるとさえ言っている（邦訳811ページ）。このような問題意識から出された『純粋理性批判』では，ヴォルフとバウムガルテンが考えたような，不完全さを伴っている下級認識能力（「経験心理学」）を「理性心理学」の理性によって普遍的な認識を形成することが出来るとしたのは間違いで，それでは正しい認識は生まれないとした。そこでカントは理性と純粋理性を区別することが必要で，理性は「経験心理学」で得られたものを比較照合することで共通性を見出し，概念を形成していくという意味では，外界に依存していると考える。ここまではヴォルフとバウムガルテンが考えたことと同じである。だが，このようなヴォルフ・バウムガルテンの言うような経験に依存してしまうのでは，いつまでたっても認識＝真理の不完全さは解消出来ないのであって，外界から独立した認識を生み出す能力が必要となる。これが「純粋理性」であり，これまでの「理性」とは区別する（＝批判する）という意味でこの理性を「純粋理性批判」とした

のは承知のことである。カントが『純粋理性批判』の序論で書いている次の有名な一節が経験と理性的判断のどちらも不可欠であるというカントの考えが端的に示されたものであることをここでも確認しておきたい。以下の文章である。「私たちの認識はすべて経験とともにはじまる。この点については，まったく疑いの余地はない。というのも，もし対象によるのでなければ，認識能力はいったいなにによって呼びさまされ，活動するようになるというのだろうか。(中略) 時間に関していえば，だから私たちのうちに生じるどのような認識も経験に先立つことはなく，経験とともにいっさいの認識ははじまる。わたしたちの認識がすべて経験とともに開始されるからといって，認識はそれゆえにことごとく経験から生じるというわけではない。」(邦訳34ページ)。

このような考え方を取ると，「純粋理性」は経験に依存することなく独善的に認識を形成するのではなく，かつ一定の客観的な経験から得られるものをどう使っていくことで得られるのかを明らかにしなければならなくなる。そこでは，ヴォルフ流の形而上学では具体的な人間存在である主観からは切り離された存在を対象にしてしまったし，他方，心理学は主観的，内在的な心理的なものを対象にしているので，「形而上学」にも「心理学」にも依拠することが出来なくなってしまっている。このようにカントは考えたが，それでは心理学はどのようなものであるべきだとしたのだろうか。城戸によればカントが心理学についてどのように考えていたのかはカントが人間学と形而上学の講義の中で経験的心理学の位置づけなどを論じていたことがプレル (Prel, C.) の『イマヌエル・カントの心理学講義』(1889) から知ることが出来るが，カントが最終的に彼の批判哲学の中に心理学をどのように位置づけをしたのかその結論は『純粋理性批判』で論じられている。城戸の記述もこの『純粋理性批判』にもとづいている。前にも触れたように，カントによってヴォルフとバウムガルテンの「理性心理学」のような形而上学的発想や，心理学と論理学との区別もなく，同一視されてしまったような心理学は否定されてしまった。カントにとっては，いかにして経験をアプリオリな理性的認識でもって総合的に判断することが可能であるかを解くことが課題であった訳で，いわば彼の「論理実証主義」の中では経験的認識を担うことが出来る「経験心理学」は内容のない思想の空虚性や概念のない直観の盲目性 (『心理学問題史』296ページ) に歯止めをかけていくものとして重要な位置づけが与えられたのである。いわばカントの認識論における現象主義の立場からすると，経験データと経験的認識の方法を論じる学問としての「経験心理学」の可能性が位置づけられたのである。ただ，カントにとっては，彼の批判哲学を担うものとしての「経験心理学」であって，いわば総合的な「人間学」の中に位置づけられて始めてその意味と役割が認められるものであった。その意味では，今日の他の学問分野との総合などといった発想を持つことのない心理学はカントからすると人間理解の体系的な理解は不可能だということになる。城戸はカントの心理学について次のようにまとめている。「カントの心理学が人間学に外ならないと解せられるならば，それは単なる自然学としての経験心理学ではなく，訓練としてのみ認められる理性心理学または先験的理念を問題とする弁証法的心理学を含む心理学でなければならない。」(『心理学問題史』299ページ)。そしてカントの人間学には人間学的教授論や人間学的性格論から成っていることを考えるとその人間学は教育学と緊密な関係を持つし，実践的教育の基礎知識を与えてもいると言う。ここからは城戸の心理学，さらには教育学の性格づけにカントの人間学が影響を与えていたことが分かる。それはこの後でもみていくカント以後のドイツの哲学的人間学についての城戸の注目の仕方，そしてそこから心理学

研究はどのようなものであるべきかと考察していったところにも城戸がカント哲学を重視する姿勢が具体的に表れている。城戸にとってドイツの心理学から得たことは，カントの純粋理性の考えを取り込みながら，同時にそれを克服していくことで心理学を作り上げていこうとしたカントとカント以後のカルスの心理学にそのあるべき形を見出したことである。カルス（Carus, F.A.）の心理学についてはこの後でみていくが，カルスの心理学もその前提にはカントの心理学があった。

いずれにしても城戸がカントの心理学を考察していく中で得たことは，専門分野に分化・分断された心理学では人間精神への全体的把握を目指した人間学とはほど遠いものになっているということである。人間学的発想をどう心理学は持ち得るかという課題を解決することが城戸にとって心理学が目指すべきことだった。だからこの『心理学問題史』の前に書かれた『現代心理学―その問題史的考察』（1950）の序説でも，カントに触れながらカントの到達点，そしてカントを超えることの必要性を説きながら，人間学の問題はカントによって哲学の根本問題へと高められることになったが，心理学の問題としてもカント以後の哲学的人間学，そして精神科学で明らかにされたこと，あるいはその問題点を解明することを心理学史の課題として位置づけていた。

カントの「純粋理性」の考えは理性を過剰に強調しているという批判が出されるが，その典型がヘルダーの発言である。城戸はカントの説明の後，ヘルダーの考え，特に彼の感性と言語起源を中心に取り上げて，18世紀後期の人間精神を巡るドイツにおける論争を概観している。ヘルダー（城戸の表記ではヘルデル）のカント批判は，カントの言う純粋理性，先験的な認識は現実離れをした空疎な中に置かれているだけで，いったいこれらがどこから来るのかが一向に解かれていないのではないかというものである。そこでヘルダーは有名な言語的活動に理性の起源を求める。先に先験的な認識が存在するのではなくて，事物を名指すこと，ものの命名こそが認識することなのだと言う。ここからは主体の活動がカントの純粋理性，先験的な認識に代わって出てくる。そしてヘルダーは認識の実体は主体の生命的な活動にあるとしたライプニッツ的発想に戻っている。あるいはスピノザ的発想でもある。城戸がヘルダーの部分で指摘していることだが，「人間的悟性の起源と発達」が議論の対象になっていることに表れているように，カント，ヘルダーの時代におけるドイツ心理学の動きとして認識形成の主体としての活動の役割がカントの「純粋理性」の考えと並行して議論されていたということである。それはカント以後のフィヒテの有名な「事行概念」に見られるような主体の対象との関わりと表現行為によって認識成立を説明しようとする試みや，シェリングの自我意識ではなく「自我」の存在そのものへ注目していくという動きとして表れている。これらはいわばドイツ観念論哲学の主要な論点にもなっていったものである[5]。まさに，人間精神をめぐる心理学研究の基本的課題が出揃ったということでもあるだろう。そこでこれらをどう解こうとしたのか，その後のドイツ心理学の動きが心理学の性格を考えていくために城戸はこの後のドイツ観念論の中で心理学研究の動きをみていことになる。ただ，この時期の心理学は城戸が指摘していることであるが，人間理解の方法というものであり，そこでは心理学の体系化は作られることはなく，むしろ心理学に科学としての体系化を行ったのはカルスであったと言う（『心理学問題史』330ページ）。

(2)19世紀初頭のカルスの心理学とゲーテ，フンボルトの思想

城戸は19世紀初頭におけるドイツの心理学研究の先駆けを作った研究者としてカルス(Carus, F.A.)の心理学に注目し，『心理学問題史』の第3篇・第3章「人間の理解」の中の第1節全部を使って紹介している。城戸はカルスが遺した遺稿集を使いながらカルスが心理学の体系化を試みようとしたその内容について述べている。なお，このカルスの遺稿著作集全7巻は北海道大学教育学部内にある「城戸幡太郎文庫」に収められている。

城戸がカルスに注目するのは，心理学の体系化を試みただけでなく，カルスが人間性の発達を文化とその歴史的発展と関連づけて論じたところにある。城戸はカルスの心理学の特徴を次のように述べている。「人間の意味についての厳格な概念規定は人間の歴史に認められる発達の理念によるのであって，彼の心理学は人間意識の発展を問題とする人間学に外ならないのであるが，それは人間性の歴史として考察される心理学であって，彼の『一般心理学史』は人間性の発達から見た心理学的知識の歴史的考察であるともいえるのであり，彼によって歴史的心理学の原理が示されたものといえよう。」(『心理学問題史』333ページ)。このようにカルスは人間性の発達としての理性の成長をいくつかの発達段階に分け，それぞれの段階にある主体のことを想定しながらそこで必要となる教育内容(教材)と方法によって自己意識を自覚する方向へと導かれていくことを論じていた。そして，カルスは先に上げたフィヒテ，シェリングと同じように，主体としての「一者」(同上337ページ)を問題にし，主体の理性の獲得を発達と教育の問題としたのである。だからカルスは「ア・プリオリの原理から演繹しないで，自然に関する経験の事実から説明しようとした。」(同上338ページ)。そして，カルスは発達の原動力をここでもフィヒテとシェリングが強調したのと同じように主体自らが何かを産出すること，つまり精神の表現に人間の認識と知識の発達が表れるとして，これを心理学の問題とした。城戸の表現によればカルスの心理学は「歴史的人間学」ということになる。

このカルスの問題意識は，城戸が心理学研究として位置づけた人間の発達は文化内容を自己のものとしていく「文化的個性化」の考え方につながるものであり，この「文化的個性化」の活動を支えるものとして教育があるとした発想と重なっている。

19世紀初頭の心理学は哲学の中で主に認識の問題として議論されてきたが，ヴォルフとライプニッツの形而上的研究を批判することからカントの心理学が生まれ，さらにカントの理性主義では論じることのなかった主体の活動への注目がカルスと新カント派のフィヒテ，シェリングの登場を生み出すことになった。このように，19世紀初頭の心理学は哲学の一分野ではあったが，次第に人間精神の発達や形成という独自の心理学的課題として議論されるようになる。城戸はそのような動きの中で生まれたのがゲーテやヴィルヘルム・フンボルトの研究であることを指摘する(『心理学問題史』353ページ以降)。ゲーテは心理学について直接何も言っていないが，彼が行った「形態学(Morphologie)」と「色彩論」は自然界に存在する様々な形態の背後に一つの原型があること，そのことをただ理念だけでなく，有機体を直接観察することからその本性が直観として得られてくるという新しい自然哲学の思想を出して心理学の研究に新しい方向を示すことになった。彼は観察で得られた「経験的現象」，実験や比較観察による「科学的現象」，そしてこれらの本質にある「純粋現象」という三つの異なった「現象」があり，この三つの段階を通ってゲーテの言う「原現象」を捉えることが出来るとした。彼は現象の本質に潜む「形態」はそれが形となって表れていくことで具体的に明らかになると考えた。城戸はこの考えはこの後のゲシュタルト心理学における「ゲシュタルト」と「形

態同型論（Isomorophismus）」の元になっていったと言う（同上362ページ）。さらに，ゲーテが言う表現という形態変化の過程は人間の成長変化のことでもあり，彼は感性や悟性，理性という精神の基本能力にこれらを総合していく「構想力」が加わることで個性の表現と生命の創造があると考えた。ここにはこの時期のドイツのいわゆるロマン主義の流れの中で生まれてきた主体の表現的活動への注目がある。同じように，ヴィルヘルム・フンボルトは言語学の中で独自の言語有機体論を出し，言語を産出＝表現する活動（エネルゲィア）によって精神が形成されてくることを強調していたが，フンボルトの言語の比較研究や人相学はいわば形態（形式）とそれによって表現される精神に関する説明は広く人間学の問題でもあり，また形式と表現を結ぶことによる新しい心理学の方法論の提起でもあった（同上373ページ）。なお，フンボルト言語学のエネルゲィアの思想はロシア言語学のポテブニャ，バフチンの言語思想，そしてヴィゴツキーの言語論に影響を与えたことも付記しておかなければならない。

このようなゲーテ，そしてフンボルトの象徴としての形態とその表現を問うことで人間精神を明らかにするという考えはもう一人のカルス（Carus, C.G.）の心理学へと引き継がれていく。これが次の城戸の『心理学問題史』の第3篇・第3章の第3節「19世紀初期におけるドイツ心理学の動向」である。

(3) 19世紀初頭・中期のドイツの心理学とその動向

この時期のドイツ心理学はカントの「人間学」の継承・発展，あるいはその克服を巡っていくつかの方向に分かれて展開されていった中で出てきたものである。つまり，カントがヴォルフとバウムガルテンの形而上学を否定して「理性心理学」に取って代わって「経験心理学」を人間理解のための学としたことを受けて，このカントの「経験心理学」をどのように発展させていくかという時にいくつかの異なった方向が出されることになる。城戸はここではフリース，ベネケ，ヘルバルト，カルス，そしてヘーゲルの精神現象学といったいわゆる精神的人間学あるいは哲学的人間学としての心理学の動きについて概観している。実は城戸は『心理学問題史』のはるか前の1932年に「哲学的人間学」という比較的長文の論文を書いている。そこで書かれている内容は『心理学問題史』のこの部分の内容を補完することが出来るものであり，ここでも必要に応じてこの論文をみていくことにする。「哲学的人間学」の方が『心理学問題史』よりも詳しい論の展開をしているところがあるからである。なお，城戸の「哲学的人間学」の論文は彼の心理学と教育学に関する思想の出発点にもなっているものであり，これについては後のところでもう一度取り上げることにする。

フリース（Fries, J.F.）の「哲学的人間学」はカントの「人間学」を継承したものと彼自身は位置づけているが，それはあくまでもカント「人間学」の一部分を扱っているだけである。カントの「人間学」はカントの哲学体系の中では，純粋哲学と対置される経験的哲学を構成している経験的物理学と経験的人間学の中の後者にあたるものである。そしてカントは人間についての「知」を自然学的な生理学的立場と実際的立場の二つに区分し，この後者の方を「人間学」と位置づけていたのである（城戸「哲学的人間学」5ページ，『心理学問題史』571ページ）。だからカントの晩年の講義をまとめたものは「実用的見地からの人間学」となっている。カントの「人間学」についてはこの後の節で城戸の思想と関連づけてやや詳しくみていくことにする。

フリースはこのようなカントの「人間学」の一部である生理学的人間学，自然としての人間学をもっぱら問題にした。フリースは心理学をこのような自然学的な人間を理解するための

方法として位置づけたが，特に彼が人間理解の方法として考えたのは言語による表現であった。その意味では生理学的研究とも異なった方法が取られていた。フリースは人間精神というのは生命活動として統一されているので，認識，感情，意欲、努力といったものを分離しないで扱わなければならないとした。そこで彼は言語表現を哲学的人間学の具体的な方法として位置づけたのである（「哲学的人間学」9ページ）。そして城戸はフリースに対しては，カントの「人間学」で重視しているような人間の日常生活で起きている実践，それは人間と人間との実際生活のおける交渉であるが，を問題にしないで人間精神の内部現象について言語表現を使って一般的な法則として説明してしまおうとしたこと（同上10ページ），そして教育による形成よりも素質としての人間の才能を重視してしまったと批判している（『心理学問題史』379ページ）。この点もこカントの「人間学」では経験としての教育の役割を重視していたこととは異なっている。

フリースが自然学としての人間学で用いた自然科学的方法と類似した発想で，精神現象を今度は数学的方法によって説明しようとしたのがヘルバルト（Herbart, J.F.）で、彼の「表象力学」の考えである。彼は国とそれを構成する人間の思想や感情は言語による表象体系の問題として扱うことが出来，それらは具体的には表象間の力学的関係として数学的に捉えることが出来るとした。ヘルバルトは形而上学的発想に基づいて人間精神への接近を行っているが，同時に彼は人間が理性を正しく遂行出来るようになる，つまり表象の形成のためには教育が必要であるとして実践哲学も位置づけている。これがヘルバルト教育学で，人間の発達・成長は理念によって制御されるものだが，教育の目的を達成するための方法として心理学の研究があるとして，ここに心理学が位置づけられている。ヘルバルトの数学的方法は心理学をきわめて一般的な法則でもって表現しているが，城戸ははたして人間精神を国の文化・歴史や教育学との関連なしに表象の力学として数学的心理学として研究出来るのかと述べて，ヘルバルトの思想を批判する（『心理学問題史』395ページ）。要するに，ヘルバルトの心理学では表象の力学体系としての抽象的な自我は存在しても具体的に人間精神の姿は描かれていないのである。これが城戸のヘルバルト批判の要点であり，城戸はいくつかの書物と論文でヘルバルトを批判している。そして，城戸がこのようにヘルバルトの中にある心理学的方法に対して抱いた疑問は今日の一部の心理学が抱えている問題でもあるだろう。ヘルバルトの数学的方法はその後形を変えて自然科学的心理学へと発展し，フェヒナーの精神物理学，ヘルムホルツの知覚生理学，そしてヴントの生理学的心理学へと進んでいったことは心理学の歴史として承知のことである。

フリース，そしてヘルバルトの人間への自然学的接近を批判したのが，同じ時代のベネケ（Beneke, F.E.）で，城戸はベネケの心理学は形而上学から独立させる試みとして注目をする（『心理学問題史』383ページ）。今日，ベネケの心理学については全く取り上げられることはないし，城戸の記述によって知るのみである。城戸が取り上げているベネケの『自然科学としての心理学教本』は北海道大学教育学部内にある「城戸幡太郎文庫」にある[6]。城戸もこの著書を使ってベネケの研究を紹介している。ここでは，ベネケの研究を城戸の記述を頼りにその内容を概略的に述べると，彼の心理学は意識を現象学的な分析によって行っているのが最大の特徴であり，生得的，先験的な能力に代わって精神の発達的変化を位置づけたことである。そこでは，精神の形成を人間が持っている根源的力としての「原能力（Urvermorgen）」によって経験を意味づけていく活動として説明されている。これはカントの「経験的心理学」の継承

でもある。特に自己が経験していることを直接意識として感じることで精神が自己の内面として作られる根拠になっていること，身体で感じた感覚や知覚も外部知覚であると同時にそれは内部知覚として生じてくるので身心は並行関係になっていると言う。この解明のためにベネケは心理学を自然科学的方法で展開しようとするが，それはあくまでも直接的経験の分析のためのものであって，唯物論でも唯心論でもない独自の方法であった。そして，先に述べたように，人間精神の基本的原理は発達と形成にあるから，外部刺激から生じる感覚・知覚を一つの共通する形象として内面的に形成していくとしたこと，さらにはこの内面的な自己意識の中でも絶えず作用の変換が起きているとした。これらを可能にしているのが人間精神の中にある「素養（Angelegtheit）」である。ここでもカントの「構想力」の考えとの類縁性を確認することが出来る。

ここまでみてきたフリース，ヘルバルト，ベネケと同じ時代にドイツの心理学を展開していたのがカルス（Carus, C.G.）であるが，前のところでみたように，彼はドイツ観念論のシェリングの流れに位置しており，ゲーテとヴィルヘルム・フンボルトの思想の影響を受継いでいる。カルスは認識を無条件に確信してしまうことは主観に過ぎず，そこに客観が介在しなければならないとした。先のベネケと同じ立場に立つ考えであり，またカントの延長にあるものである。そして「客観は主観の客観化」という言葉で表現されているような主観と客観，内と外の連関の中で精神を形成していく創造性とその発達の可能性を持った生命そのものが心や精神なのだと考えた。カルスはこの精神の形成には言語が主要な役割を果たしていることを強調するが，その前提には言語はそもそも存在の本質であるイデアを表現する象徴であるという彼の考えがあったからでもある。カルスはこのように内なるものを外に向かって象徴体系である言語を使って表現していくことで人間精神は形成されていくとして，これを「人間的形態の象徴学」と称した。彼の象徴的表現行為の研究はクラーゲスの一連の表現やリズムについての研究やクレッチマーの「体型と性格」へと発展し，また言語発達のカール・ビューラーの研究へつながっていった。このようにみると，カルスというほとんど心理学では登場することのない研究者が今日の心理学の中でも知られているクレッチマーやビューラーの研究の源流になっていたことが分かるのである。なお，カルスの主要な著書である『精神，精神の発達史について』（1846），『人間的形態の象徴学』（1953），『自然と精神の認識の機関』（1856）も北海道大学教育学部内の「城戸幡太郎文庫」に収められている。

このように，この時期のドイツ心理学は科学としての心理学を発展させる過渡期にあったが，心理学は哲学的人間学あるいは人間学の中に位置づけられながらその性格の下に心理学的研究として存在していた。明らかに哲学の一部として心理学があった訳だが，この哲学的人間学，あるいは人間学の中で人間精神がどのようなものとして議論されていたのかを考えることで心理学が目指すべき人間研究のあり方はどこにあるのかを再考するきっかけになる。そのことは次のカントの「人間学」と城戸の「哲学的人間学」の論攷をもとにして考えていくが，19世紀初頭・中期のドイツ心理学の中でベネケ，カルスによって発達の問題が議論されていたこと，そしてそこから教育の問題も心理学の研究としても射程に入るようになったということである。

城戸はこの時期のドイツの心理学のもう一つの動きとしてヘーゲルの精神現象学を上げている。彼がヘーゲルのそれに注目するのは，心理学を哲学の方法として位置づけたのとは異なってヘーゲルは人間精神そのものを論じる精神哲学として心理学を論じていたからであ

る。ここではヘーゲルの精神現象学を詳しくみていくことはしないが，城戸はヘーゲル自身は精神現象学を心理学とはみなさなかったが，『精神現象学』の第3部の自己意識の観察を論じたところは心理学の問題そのものであるし，彼の有名な弁証法はまさに科学的認識の形成の問題でもあると位置づけている。

(4) 19世紀後半の心理学

ヴントに代表される自然科学的な手法を用いた心理学研究が始まった19世紀後半の心理学では，一つには形而上学的心理学からの脱却として自然科学としての心理学が展開されることになったが，同時にこの時期の心理学には自然科学的な発想だけによらない独自の方法で心理学を経験科学として展開する試みや，人間学としての心理学や精神科学としての心理学という発想から行われたものもあった。その主なものは，ドゥーロビッシュ（Drobisch, M.W.），フォルクマン（Volkmann, W.F.）ロッツエ（Lotze, R. H. ）らの心理学である。ドゥーロビッシュはヘルバルト心理学を継承して人間の認識と表象を数学的手法によって経験科学として研究することを模索した。彼は同時に人間精神として表象の中に感性（感情と努力）や思想も含めており，これらを内部経験から観察しようとした。さらに表象形成の問題を発生的方法で明らかにするという発想も取られていた。同じように人間精神を発生的方法によって客観的に認識していこうとするワイツ（Waitz, T.）もいたが，いずれも形而上学的心理学から脱して経験科学として心理学を構築しようという試みであった。フォルクマンもヘルバルト心理学を完成させた心理学者であり，ヘルバルトと同様に認識や思考を分析的に研究する分野と，総合的に分析する分野との体系化を試みたものである。そこでは心理学以外の論理学や美学などもフォルクマンの心理学の中には含まれていた。そして心理学の方法としては自己観察，つまり内省が中心で，主観的な歪みを正すための補助手段として身体反応を分析する生理学，言語反応や表情を分析する言語学，表現学が用いられている。これらのフォルクマンが補助手段として位置づけていたものがその後の心理学では主な分析方法となっていくことになる。ドゥーロビッシュとフォルクマンといった名前は今日の心理学では言及されることはないが，ヘルバルトの思想を受け継いだ彼らの数学的心理学はこの後の生理学に依拠した心理学とは別の形の数的処理による心的活動の表現という科学的手法を後の心理学に提供することになる。

ロッツエの名前は『論理学』の書名と共にプラトン・イデア論的解釈者として今日の哲学の中でも登場してくるし，彼の考えはフッサールのイデア論にも大きな影響を与えた人物として知られている。つまりフッサールが人間の意識作用は時空を超えて安定した形で存在するイデア的なものを介在して行われるといういわゆる「意味のイデア性」の発想はロッツエから直接得たものであった。そして，ロッツエは感覚の生理学的研究にも取り組んでおり，その一つが空間知覚の「局所徴験説」である。これは，皮膚の表面を少し離れた所を二カ所針等で刺激した時に別な場所を指したという空間知覚が生じるが，それは感覚器官の空間的距離を表す二点が刺激された感覚によって生じるというまさに「局所の小さな感覚」に根拠を求めるものである。これは識閾値の問題として今日の感覚心理学でも取り上げられているものである。ただ，ロッツエは心理学を人間学として位置づけ，その体系化を試みた形而上学的心理学者でもあった。だから，彼は人間精神を多面的な角度から問題にして，経験科学に加えて理念的心理学としての心理学を構築しようとした。そこでは感性の問題も感覚といった狭い

ものにしてしまわず，言語の思考，認識，道徳性といった問題や，道具の使用や装飾といった文化的問題も人間精神としての「小宇宙」の問題として位置づけられていた。そして彼は人間精神が一つの理念と合目的的なものに向かって進む自発性を発達の問題とした。そしてこの「小宇宙」としての人間の歴史の中には教育学も含められていた。ロッツエの名前はヴィゴツキーの「心理学の危機の歴史的意味」(1927) の中にも出てくる。人間精神を自然科学的な方法で解明出来ると信じ込み，それが心理学の方法であると信じて自分たちの学問の存在意義をいつまでも主張している人たちがいることをロッツエが「つぶされかかったようなウジ虫でさえ，自分の存在をアピールしようとしている」と言っていた言葉（邦訳195ページ）で表現していた。ヴィゴツキーはこの論文の中では，心理学の研究として自然科学的方法を用いることが自明のこととし，はたして人間精神はそれで正しく捉えているのかという反省をすることもなくなった心理学の「危機」を問題にしていたのである。そもそもヴィゴツキーの「心理学の危機の歴史的意味」という長大な論文も，城戸と同じように，心理学研究があまりに自然科学的方法に拘泥する余りに本来の人間精神の本質を捉え損なっているという心理学の「危機」を心理学とその成立前夜の歴史を論じたものなのである。その意味ではこの論文も城戸の心理学史と同じように心理学の「問題史」である。もっともヴィゴツキーのそれは城戸が『心理学問題史』の中で書いているような個々の研究者の研究内容の詳しい説明がないために理解に多大の苦労を要するものではある。

城戸が書いている19世紀後半の心理学の中では自然科学的方法と精神科学的な心理学との二つが併存し，いわば健全な形での「揺れ動き」があった。それがどこからか自然科学的な心理学が人間精神の正統な方法となってしまっていった。論理的実証主義で知られるジョン・スチュアート・ミル（Mill, J.S.）も一方では自然科学的方法で心理学を研究することを提唱し，連想の法則や学習としての習性学などを考えたが，他方では道徳性を心の法則を明らかにすることも心理学の研究として位置づけていた。それは，自然の法則と，それによっては説明できない心の法則とを結びつけようとする試みであった。同じく精神物理学研究として今日でもその名前が登場してくるフェヒナー（Fechner, G.T.）も人間精神を自然科学的手法だけで解こうとしたのではなく，彼には精神を類推活動として考えたり，身体的記号が精神的活動の基本にあるものとして位置づけるという発想があった。人間を含む有機体には生命力，潜勢力，緊張力といったものがあると考え，それを身心の関係として論じたのが彼の精神物理学であった。彼は植物が持っている合目的性にも注目し，植物の精神を論じてもいた。ただ，今日では彼の名前は「ウエーバー・フェヒナーの法則」として知られているだけである。

以上，城戸が19世紀後半の心理学として取り上げたものの中で主だったものだけをみてきたが，ここから分かることはこの後の主流になっていく自然科学的心理学だけが当時の心理学として存在していたのではなく，それと並行して人間精神を広い観点から論じていこうとする傾向や，時には哲学的な精神科学の発想を背景に持った心理学が存在していたということである。そこには自然科学的発想だけで人間精神を論じていくことの「危うさ」と「戸惑い」を感じる人たちが少なからずいたということである。

5．城戸の心理学思想とその理論的背景

(1) 城戸心理学思想におけるカント「人間学」の位置づけ

19世紀のドイツ心理学とその思想に大きな影響を与えたのはカントであった。ここでは城戸が『心理学問題史』と1932年の論文「哲学的人間学」で繰り返し言及しているカントの「実用的見地からの人間学」を通して，城戸が人間研究としての心理学研究の性格を考えていく上でカントの「人間学」の影響を受けていたことを確認していく。城戸は『心理学問題史』と「哲学的人間学」の中でカントの「実用的見地からの人間学」についてその内容を詳しく述べている。この論文はカントの晩年のもので，彼の講義録をまとめたものである。なお，城戸は「実践的見地からの人間学」と表記して，「実践的」という言葉を使っているが，ここでは「実用的見地からの人間学」という表現を用いる。これは現在『カント全集』の中に収められている（岩波版『カント全集』第15巻・『人間学』，理想社版『カント全集』第14巻・『人間学』）。カント全集の『人間学』には「実用的見地からの人間学」と「人間学遺稿」の二つの論文がある。カントは「人間学」を彼のいわゆる「三批判書」（『純粋理性批判』，『実践理性批判』『判断力批判』）の実践版，応用的な哲学として位置づけていたが，それだけではなく「人間とは何か」という問いに対する総括という意義づけもしており，人間理性の究極目的を明らかにしようした。その意味では「人間学」は「人間とは何であるか」という人間理解のための基本問題に対するカントの「答え」でもあった。だからこのカントの「人間学」はこの後もみていくが，フーコーもカントの「人間学」に注目し，「実用的見地からの人間学」の翻訳，序論，注記を加えたものを表しており，それをフーコーなりの人間研究のための基礎として据えている（フーコー，1961『カントの人間学』）。これはフーコーの学位論文の副論文であった。なお，主論文は『狂気の歴史』である。

城戸は『心理学問題史』の中で，「実用的見地からの人間学」はカントが形而上学を乗り越えようとして位置づけた「経験心理学」に加えて，人間とは何であるべきかという人間と文化の目的と価値を位置づけたものにしていくことを目指したものであって，これによってカントの心理学は人間学になると述べている。このあたりのことは城戸の「哲学的人間学」ではもう少し詳しく述べている。人間学が実用的人間学であるためには，単に世界のことを知っているだけでは不十分で，実際に他の人間との関わり方についての実践的知識をもっていなければならないこと，そのためには例えば芝居を見ることを超えて実際に芝居で演じてみなければならない。それによって世間（世界）を持つことが出来るようになる。このように城戸が述べているのはカントの「実用的見地からの人間学」の「はじめに」に書かれているものである。カントの文章をここでは分かりやすさを優先して岩波版から拾ってみる。「人間学が学校を卒業したのちに習得しなければ世界知と見なされる以上，世界中の事物の認識を列挙するだけでは，例えば国ごとや気候ごとに動物，植物，鉱物に関する知見を長々と開陳するだけでは，本来まだ実用的な人間学とは呼ばれず，人間を世界市民として認識する内容となっていてこそ，人間学は実用的人間学と呼ばれるのである。…ところで『世界を知っている〔世情に通じている〕』というのと『世界を持っている〔交際術を身につけている〕』という二つの表現があるが，意味の点では両者は相当隔たっており，というのも前者は自分が見物した芝居〔戯れ〕をただ理解するだけであるのに対して，後者はその芝居に共演したことがあるからである。」（邦訳12ページ）。ただ，世間（世界）は広いので，我々が直接に交渉できる世間は狭い範囲に

限られる。そこで，世間と交渉していくためには直接社会と関わり，他に間接的に人間の表現したものを通じて理解することが必要である。

城戸は「哲学的人間学」の中で次のように言う。「哲学によって秩序づけられ指導されなかったならば，それらの見聞は断片的模索に止まってしまい知識ということができない。ここに局部認識の前に一般認識が要求されるのである。ケーニヒスベルクから一歩も出なかったカントの人間学が実際的見地からの人間学として意味あるものとすれば，それはカントの哲学的方法にあったと言わねばならない。」(11―12ページ)。実はカントはこの「実用的見地からの人間学」では意識の成立していく過程を一つの体験旅行記のような形で書いており，どのようにして世界に向かって経験の旅を続けていくかという喩えを使って論を進めている。面白いのは城戸も指摘しているように，地元のケーニヒスベルクから出ることのなかったカントが世界（世間）を知ることが出来るのは個別の経験を一般認識にしていくことで得られる客観的な認識が可能になるからだということである。

このようにカントが「大局的知識が局地的知識に先行する」(岩波版邦訳13ページ）と言っているのにはもう一つカント自身が被った言論弾圧事件が背景にあると言われている。カントが『純粋理性批判』を献呈したツェードリッツはフリードリヒ大王に仕えていた文教行政の責任者であったが，フリードリヒ大王の後を継いだヴィルヘルムⅡ世はツェードリッツに代えてヴェルナーを文教行政の責任者にした。彼らは隣国のフランス革命が飛び火してくるのを恐れて思想出版物の検閲を強化し，カントのいくつかの論文も印刷不許可となった。さらにカントはフランス革命擁護の立場であったために宗教に関する講義と著述が禁止されるという処分を受けてしまった。このことを局所的な知識，例えば酒場談義のような情報のみをもとにして知識を得てしまうことはフランスで何が起きているか自国の中でのみ語られてしまってそれを大局的にみることが出来なくなってしまう危険性をいつもはらんでいると警告していた（岩波版解説521及び527ページ）。だから哲学によって秩序づけられ，指導されるという意味での教育が必要なのだという。

城戸はカントの「人間学」の中にある実践的教育の役割に注目する。そもそもカントの「実用的見地からの人間学」のはじめの部分では，カントは，1）人間は文化（陶冶）を通して自己教育していく理性的存在であること，そして，2）人間は自由に主体として自ら何かを形成していくことを明らかにするのが「実用的な人間学」で究明すべきことであり，3）人間を世界市民と見ていく視点が「実用的な人間学」の真髄であるという3点を述べていた。そして，実際に「実用的な人間学」は第1部と第2部で構成されているが，第1部の「人間学的な教訓論」では，人間の感性，意欲，構想力，そして認識能力という人間のみが持っているものをどのように手に入れるべきかをいわば「教訓」の形で伝えている。そこでカントがねらいとしているのはこれらの自己形成であり，同時にそれは社会や世間が持っている教育によっても実現されることを指摘することであった。そして第2部の「人間学的な性格論」では，人間の中にある社会的側面について具体例を挙げながら述べているが，要するにそれは社会的存在としての人間とその自覚を目指したものであった。特にこの第2部の最後の「人類の性格」，つまりこの論文の最後はカント人間学の結論ともいえるものだが，城戸も『心理学問題史』の中ではカントのこの部分の文章を引用しながらカントの人間学の中にある教育と文化の役割を強調している[7]。ここでカントは人間というのは文化を通して文明化（市民化）を促進し，さらに人類全体の道徳化を実現する課題に立ち向かっていくこと，それを実現していくことが「実用的な人間学」の

任務であると述べているが，城戸がこの部分に着目していることから分かるように，城戸自身の人間精神とその成長に果たす文化そして教育の役割が城戸の「文化心理学」に関する研究や，彼の「文化的個性化」の考えは多分にカントに影響を受けたものであった。このような城戸の課題意識は彼のドイツにおける心理学研究の推移を詳細に検討する中で得られたものである。そのことが彼の『心理学問題史』を通して具体的に分かるのである。

カントの「人間学」の内容は講義で話されたものであり，受講者にも大変な好評を博したと言われているように，現実の社会の中でも人間の振るまいとその有り様を実にうまい喩えを使って平易に論じられ，カントが生涯を通じて言いたかったことが簡潔にまとめられている。これがカントのものかという意外性に驚かされるが，カントが人間学や哲学で目指そうとしていたことは内容的にはまさに「人間学（anthropologie）」であり，それは心理学も含む人間理解の学際的学問だったということである。そして次の城戸の「哲学的人間学」のところでみていくように，城戸が心理学を通した人間理解の営みとしてめざすべきものもこのようなものだったのである。

先に述べたように，フーコーがカントの「人間学」に注目していたことについても言及しておく必要がある。フーコーはカントの「実用的見地からの人間学」をどのように読んでいたのだろうか。フーコーがカントの「実用的見地からの人間学」の仏訳の序論，注記からそれが分かる。現在この長大な序論と注記が翻訳部分から分離されて一書になっている（『カント人間学への序論』，邦訳名『カントの人間学』）。フーコーは精神とは経験の領野で諸々の理念がひしめき合う運動と，ここから得られる生気を生み出していくものであり，人間学はこの生気と「生き生きとさせる原理」が人間学であること，そしてカントの人間学では諸々の事実を「人間がなしうること」と，「なさねばならぬこと」の開かれた体系の中に実践的なものとして扱うものとしてきたと言う。心は経験の領野で諸々の理念と苦闘することで，それは決して超越論的ではない形での弁証法の原理となっていく。フーコーはこのように人間学の中で考えられている精神の機能の中でも，諸々の理念は相互に作用し合う複数の多様性を構造として持ち，またそれは生成され，消えていくものと考えた。だからフーコーは，心は「なにものかである」のではなく，「自分自身をなにものかとなす」ものなのだと言ったカントに注目する。フーコーは主体の活動はいつも散逸し，自分自身からずれていく，そして自分からずれていく中にこそ主体の能動性の根拠があるといった彼の一連の研究の出発点をカントの「人間学」の思想に据える。フーコーはカントの「人間学」を彼の研究の基礎に位置づけていたことがここからも分かる。カントは人間というのは「自分自身をなにものかとなす」課題を文化の中で教えられ，学んでいくとしたが，ここがフーコー，城戸の思想へとつながっていったのである。

ここで念のために注意をしておきたいのは，人間学で言っている「教育」とは決して学校教育だけのそれではないということである。形而上学的な人間理性を根拠にしたものではなく，日常生活における人間関係の中に潜んでいる「人間が自分自身をいかになすかという」問いに対する具体的な答え，つまり人間がどのようにして世界のなかに居場所を定め，人々と社会的活動（「共演」）をすることが出来るかを分析していくことから得られるものである。それは明らかに狭い意味での教育の範囲を超えている。カントが「実用的見地からの人間学」の中で相当の分量を割いて日常の夫婦間の軋轢のことや，日常の中で起きている人間関係で生じること，その対処にまで事細かく言及し，またフーコーもそこに注目するのは，フーコー曰

く，それぞれの人間が出してくる具体的な要求の絡まり合いの網の中に法的権利だとか道徳があるのであって，これらを行為している場を切り離して扱うことは出来ないのであり，そこで具体的にどうするかということが実用的自由を得る「人間学」としての問題が存在しているのである（邦訳46ページ）。ここからも本論の中心になっている城戸が「教育」と言う言葉で言おうとしていたのもそういう意味であることが分かる。フーコーは言う。「『人間学』は文化の歴史でもなければ，文化の諸形態の分析でもなく，あらかじめ有無を言わせぬかたちで与えられている文化の実践となる。この実践は，人間に対して，自分たちの文化そのものに世界の学校を認めるように教える。」（邦訳60ページ）。世界が学校であるということ，これがフーコーがカントから導き出したことの一つである。フーコーもそして，城戸も心理学はこの「人間学」の枠の外にあるべきではなく，「人間学」の枠の中に置かれるべきだと共通に言う。

(2) 哲学的人間学

ここまで，城戸が『心理学問題史』の中で取り上げている心理学研究を主にそこで展開されている人間精神への思想的態度を中心にみてきた。この内容からも，城戸が心理学に対してどのような問題意識を持っていたのかが分かるが，ここではさらに城戸の心理学批判の背景にある城戸の人間研究としてのあるべき心理学研究の「姿」について，彼の初期の論文の「哲学的人間学」の結論部分で述べていることで確認をしてみたい。1932年の「哲学的人間学」の前半部分の文章は1948年の『教育科学的論究』の第1章：「哲学する人間の立場」にもそのまま掲載されているが，『教育科学的論究』には後半の結論部分は削除されている。重要なのは「哲学的人間学」の後半部分である。

城戸は「哲学的人間学」の結論の部分で次のように述べている（引用文は現代語文に直している）。「人間は問題を問題とすることのできる人間である。このような人間を哲学的人間と称した。従って宗教家であろうが芸術家であろうが，各自の問題を問題とする人間は凡そこれを哲学的人間と称することができる。」（37ページ）。このように城戸が哲学的人間学を定義する時，その前提にあるのは人間の行為を現実の対象と目的のためのものであるという例のマルクス由来の「対象行為論」の考えである。城戸はここではマルクスの理論を持ち出すことはしていないが，行為の目的と対象である現実を問い直すことの必要性を説いている。行為が我々の現実の問題から遊離してしまわないように。だから城戸は次のようにも言う。「我々は何故この目的にために行為し，行為しなければならないかを先ず反省してみねばならない。このような反省において自覚されることは，我々の目的に現実を離れた，現実とは何の交渉もないことをかんがえているのではないということである。然らば現実とは何であるか。現実とは現に我々が問うているものである。我々が現に何を問題にしているかということ以外に現実は存在しない。」（同上ページ）と。そして城戸は何が問題となっているかは現実の我々の生活から出てくることであって，現実の生活や生活態度と没交渉な形で存在するようなことは決してあり得ないとも言う。これはまさに先にフーコーも注目したカントの「実用的な人間学」の考えそのものである。

「どうしたらよい？」と自問する時，「問い」が生まれ，「答え」が出てくる。現実を考え直すこと，そしてそれをどう解決したらよいかと考えることが人間の営みの本質であり，哲学することの根本にあるものである。城戸はこの人間が自己の現実の営みを問うことを「哲学的人間学」と称した。この「哲学」は講壇的な学問ではなく実践の学である。そしてこの「問い」

続ける人間を育てることが城戸にとっては教育の問題だったのである。そして城戸の教育は文化実践でもあり，彼の言う「文化的個性化」のことであった。

6.「文化心理学」と「文化的個性化」

(1) 心理学における文化の問題

城戸は論文集『文化心理学の探究』(1970) の第1章で，個性としての精神活動を問題にする心理学は同時に，この精神活動を考えていく時にどのような歴史的現実として何を経験しているのか，またどのような目的と実現のために活動するかという文化的価値を問わなければならなくなると述べている。そして，精神というものが時間に規定された個性の表現であり，文化の形成である限りは，心理学は文化心理学でもあると言う。このような発想は既に彼が1926年に書いた『心理学の問題』の中でも展開されていた。そして，城戸の文化と心理学の問題は『心理学の問題』の前年の1925年に書かれた『文化と個性と教育』にその考えの基本がまとめられている。この『文化と個性と教育』は城戸がドイツのライプチッヒ大学の約2年間の私費留学を終えて帰国した翌年に書いたものであり，当時のドイツ心理学の動向を身近に感じ，またドイツ心理学の現状をみて，城戸が心理学研究として目指すべき課題を整理したものである。そこでは城戸が心理学を学際的に研究しなければならないこと，特に教育の問題を文化形成の問題として考えた時，心理学は文化心理学であり，文化形成を促す教育心理学でなければならないという彼のライフワークの課題が設定されていた。あるいは，人間を巡る学際研究としての「人間学」研究としての心理学が位置づけられていた。具体的には，この著書の中では，教育的営みは一人ひとりの人間の中に文化が形成されていくという「文化的個性化」を目指したものであり，教育心理学は歴史や社会の中に生きている人間の文化と切り離した形で扱うことなど出来ないという視点が明確に出されている。明らかにここには心理学の性格そのものへの強い批判の姿勢が現れている。

この『文化と個性と教育』は大きくは三部から成っており，それぞれのタイトルは「教育の理想としての文化」,「教育の実現としての個性」,「教育の方法としての文化の個性化」であり，全部で8つの章で構成されている。このタイトルからもおおよその内容をイメージすることが出来るだろう。「文化の個性化」を目指した城戸の心理学の具体的な姿は彼の「表現心理学」の中にみることが出来る。つまり，言語と作品を形成する行動を通して心の姿を見出し，また形成していくことが出来るというのがその考え方の骨子である。社会文化的存在である人間が教育という営みの中で文化を自分のものにしていくことであるという主張から，城戸の「教育心理学」が誕生した。そして城戸は心理学そのものの新しい構築を目指そうとした。城戸がこのような教育心理学への姿勢を持ち得たのも教育の実践の場との関わりがあったことも指摘しておかなければならない。それは東京都内の小学校にある特殊学級との数年間にわたる関わりであった。

1925年に書かれた『心理学の問題』では，文化心理学について次のように述べている。「あらゆる歴史的現実性としての人間は自然と精神と文化との三つの概念によって完全に理解することができる。あらゆる文化は歴史的現実性としての絶対精神に還れば目的実現の心の姿と

して再び時間的規定によって認識することができる。」(301ページ)。この後半の文章は，文化の問題も文化的価値に沿って文化を表現し，形成している人間精神を通して議論することが出来ることを考えるならば，それは心理学の問題になるということである。この文章に続けて精神科学も心理学の問題となることを述べている。「論理的価値の実現を心理学が問題とすることはできぬが，論理的価値を実現したカントの生活は心理学の問題となる。知識としては自然科学と精神科学と文化科学とは厳然として原理の統一性と独立性とを保っていねばならぬが，学問としてこれらを学ぶことによって知識は統一され，歴史的現実性を完全に理解する哲学的生活の理想を自己の意識において実現することができるのである。」(同上，14ページ)。これが城戸の人間理解，しいては心理学研究の理想の姿であった。

要するに，城戸は心理学が論理的価値，文化的価値という人間精神の目的を論じなければならないとするならば，精神科学と文化の問題を抜きにすることが出来ないということを言っていた。これが城戸が複数の箇所で繰り返し指摘している「心理学の三つの存在命題」である。なお，この論文の初出は，中央大学文学部紀要，哲学科，第6号（1959（a））の「文化心理学の方法論―意味の座標転換について」である。同じことは文章の改変はあるが，『心理学問題史』の結論部分，『教育心理学研究』第9巻1号の「教育心理学における文化の問題」，『文化心理学の探究』の第1章，そして『教育心理学への期待と反省』の第2章でも繰り返し論じられている。

心理学の存在命題の第1は，意識構造の解明で，ここでは人間精神における意味の体系が主な対象になる。ここでは，行動主義や条件反射では記号的意味の機能を十分に扱えなくなっているが，人間独自の記号による意味体系を獲得することによって主観の状態から文化意識の基本作用である意味体系を通して客観的な意識が形成されてくること，その問題を明らかにすることが心理学の課題の一つである。

第2の命題は，表現による精神の意味の解明である。ここでは，文化的な意味体系である記号によって第1の意識の構造は個人を超えて他人との意味の共有と相互の理解を可能にする「準拠枠」の働きをしている。第1の意識から第2の精神へと転換するのは，自分を他人へ転換することであり，それを可能にするのが表現である。ここに城戸が1930年当時に積極的に取り組んだ「表現学」の問題がある。城戸は「表現学序説」(1934) の論文，『国語表現学』(1935, 1936 (b))，『国語表現学概説』(1937) などで日本語による文章表現や「書」による表現に注目しながら表現行為にある内容と作用，ノエマとノエシス連関の問題を論じている。なおこれらの研究は『文化心理学の探究』の第2章・「言語的表現の問題」の中に収められている。この城戸の一連の表現行為の問題はまさに記号が有している意味体系とそれを使って文化的意味を表現・形成していく人間精神の問題の解明でもあった。そして，城戸はこの第2の命題である精神の問題を通して文化・歴史的変容を解いていくことは「歴史心理学」の問題でもあるとした。つまり，人間精神の背後にある文化とその歴史的変化の問題である。城戸は歴史的解釈も決して固定的なものではなく，変わる可能性を持ったものであって，この歴史的解釈を第2の問題である「精神の意義」，社会的に共有化された精神とその社会的変化の観点から論じることでもあるとしている。ここから次の第3の命題へと進むことになる。

第3の命題は，生活の形成を明らかにすることである。ここに城戸が心理学は文化的形成を促す教育の問題として論じなければならないこと，だから心理学は教育心理学であるべきだという主張の根拠がある。人間精神の問題を明らかにすることは文化を自己のものにしてい

くことで，生活を形成していくことを問うことである。そしてここに城戸の言う「文化的個性化」の問題が出てくる。城戸は言う。「歴史は単なる解釈にとどまらず，事態を変革し発展させる。それには歴史の主体性が認められる。それが個人の社会的役割であって，個人はそれぞれの役割を果たすことによって社会の一員として行動することになる。そして，これらの役割には果たすべき目的があり，その達成が期待される。この目的とそれを達成しようとする役割を自覚させるものが文化である。文化教育学ではこのような文化が問題とされる。」（『教育心理学への期待と反省』126ページ）。そして，城戸は，教育もひとつの文化であるとするならば，教育心理学はひとつの文化心理学であると言う。ここから城戸の言う「文化的個性化」を支えていくものとしての教育という位置づけが出てくる。このように，最終的には心理学はこの第3の問題圏に向かわなければならないことになる。これが城戸の心理学が目指すべき課題であったが，城戸が第2と第3の心理学の命題として指摘していることはヴィゴツキーが人間精神への歴史・文化的接近や「道具主義的方法」の思想ときわめて類似した問題圏にいたことが分かるのである。

(2) 文化的個性化と教育

心理学者・城戸幡太郎の人間思想への「問い」の始まりは城戸が大正末期，そして昭和の初期に行った表現学の研究に求めることが出来る。それに続けて文化を個人のものとしていくという「文化の個性化」として文化と人間発達を論じた「文化心理学」の研究，文化創造の主体者としての人間の形成として教育の問題が城戸の「心理学」であり，「人間学」であり，そして城戸の教育の思想であった。このような城戸の問題群を端的に示しているのが『教育心理学の反省と期待』(1981) の中の文章に出てくる「表現」「個性」そして「文化」の心理学的研究である。そしてこの3つの「用語」をつなぐものが「文化的個性化」の概念であった。この「文化的個性化」を実現し，形成するものとしての「教育的営為」の問題が城戸の言う「心理学の研究」，さらには教育心理学としての研究課題であった。

城戸が教育の問題に取り組んだのは心理学が人間形成の学として論じなければ人間を理解できないという彼独自の思想からであった。心理学は文化の中で人間になっていく人の営みを通してはじめて人間を理解できる学問になる。だから心理学は限りなく城戸の言う意味での「教育心理学」でなければならないという主張になる。このことを「心理学の問題」の歴史的検討から確認しようとしたのである。これが小論で検討してきた『心理学問題史』のメッセージであり，いわば心理学者・城戸の心理学を相対化する「歩み」としての『心理学問題史』であった。

城戸は『教育心理学への期待と反省』(1981) の第1章・Ⅲ「人間科学としての心理学」で，『現代心理学―その問題史的考察―』(1950(b)) で書いた「結論　人間学としての心理学の問題」を使いながら，心理学研究が取るべき方向とその課題を次のようにまとめている。ここで注目すべき城戸の主張は心理学の研究として自然科学に方法論的な範を求める心理学でも，また精神科学的心理学でもない学問を追究すべきであると言っている点である。つまり，人間は歴史的社会的現実的なものであるとするならば人間を社会から抽象してしまったものとして扱うことは出来ないのであり，社会科学として研究すべきであること，そして社会を変革し、発達させる当事者は人間であるならば人間を教育する教育の問題に心理学は向かうべきだということになる。ここには「文化的存在としての人間」としてとらえる城戸の「文化心理学」

の思想があり，またこの文化的なものを人間主体が自己のものにしていくという「文化的個性化」という視点が前提にある。城戸の言う心理学はむしろ教育科学として研究すべきであるという主張になっていく。これが城戸の教育科学の出発点であり，そこには心理学の研究のあるべき姿としての教育研究があった。

このようにみていくと，城戸の教育に対する仕事は本来の心理学がめざすべき人間研究と表裏一体になっているものであることが分かる。そして彼が中心になって進められた「教育科学研究」とその運動の背景にはこのような問題意識があったことをもう一度確認しておきたい。そして彼の「教育科学」でいう「科学」というのは客観的，実証的な科学を指向するといったものではなく，教育を巡る諸問題を学際的に研究するということである。このことは『現代心理学—その問題史的考察—』の最後の文章で確認できる。「心理学あるいは人間学の方法を今後は社会科学の方法によって確立することが必要である。このような新しい立場から見直された現代の心理学は，もはや人間の社会生活から抽象された単なる意識現象というが如きものを弄んでいる学問ではなく，教育学や社会学と区別することのできぬ，むしろそれらの基礎学としての学問でなければならぬ。しかし社会科学という名称は従来の社会学に対して特殊な意味を有しているから自然科学と精神科学とを統一する意味での人間学としての心理学は，従来の文化科学や社会科学という名称に対して特に教育科学としての人間学と呼んだ方が妥当であるかも知れぬ。社会生活を変革し発展させる原動力としての人間を科学的に認識し，教育してゆくのが教育科学としての人間学の問題である。」(268ページ)。このような城戸の一連の研究と教育運動の究極には「人間学」としての心理学の完成を目指そうとした心理学者としての城戸の姿があった。

7. おわりに

小論では，城戸の『心理学問題史』を通して城戸幡太郎の思想を心理学者としての城戸という視点からみてきた。城戸は決して心理学という狭い学問分野の中で論じることが出来ない幅広い学識と実践的問題に取り組んできた人であった。そこには彼が一つの狭い専門分野のジャンルを超えて「人間学」という人間を総合的に扱う学問に範を求めながら心理学を構築しようとした問題意識があった。そこでは心理学は教育心理学でなければならないし，心理学は人間学でなければならないという主張になってくる。だが，城戸の中にはいつも心理学者としての姿があった。だから彼は『心理学問題史』の「はしがき」でも北海道教育大学の学長の職にありながらも心理学への郷愁として無理をして心理学史を書き始めたと述べている。その他の書の中でも自分の中には心理学者としての問題関心がいつもあったと述べている。もちろん，ここで城戸が言う教育心理学にしてもけっして通常使われている教育心理学のことではないし，人間科学としての心理学や教育科学としての教育学は狭い意味のそれでないことは言うまでもない。しかし，明らかに今日の心理学も教育学も城戸が求めたものとは程遠いものになっているように思う。

この小論で『心理学問題史』の全てを検討することは不可能であった。『心理学問題史』で扱っている内容が実に多様で，かつその内容も詳細を極めているからである。これが600ペー

ジ近い分量の中に凝縮されている。もちろん，この小論は単に『心理学問題史』の内容の紹介をするなどということを目的としたものではなく，心理学者・城戸幡太郎の心理学思想を検討することが目的であった。そのためには，城戸が書いた心理学関係の資料についてもみてきた。これらの検討を通して，城戸が心理学者として我々にどのようなメッセージを残していったのかを確認することは出来た。城戸が書いた心理学関係の著書も相当の数にのぼっている。これらを入手にするのに時間もかかり，幾分苦労を要したところがあった。北海道大学の所蔵図書になっていないものも相当数あったからであるが，これらの文献の収集を通して発見することも多かった。そして，小論で詳しく取り上げることが出来なかったものも多かったが，それらについては他日を期したい。

注

1 城戸は『教育心理学研究』(日本教育心理学会) 第12巻第4号 (1964) で「教科としての教育心理学の研究法について―特に教育の研究と教員の養成の問題として―」という論文を書いている。ここでは，表題のように，教員養成における教育心理学とその研究法について主に教員の養成と関連づけて論じているが，後半では単に教員養成の現実的問題だけでなく，教育心理学には人間発達と人間形成に関する理論と知識が必要であり，その思想的検討をカルスやディルタイといった精神科学の知見がなければならないことを論じている。これらについてはこの小論では城戸の『心理学問題史』を検討していくことで幾分詳しく論じておいた。また，この城戸の論文では教員養成の方向として教科教育についての学際的研究と学問のセクショナリズムの克服の必要性を論じてもいる。この論文は城戸の『教育心理学への期待と反省』(1981) の第2章の中に再録されている。城戸が教育心理学の性格とその課題を巡って論じたものは多数あるが，『心理学と教育』(1958)，そして日本教育心理学会総会におけるシンポジウムの発言をまとめた「教科の教育心理学的研究の問題と方法」(『教育心理学研究』第6巻第3号，1959 (b)) などである。前者では，教育心理学は心理学の方法と成果を利用した「応用の学問」ではなく，学校の現実と問題を研究の対象とする独自の研究課題を持ったものになるべきであると言う。また，後者では教育心理学はアクション・スタディを目指さなければならないと指摘する。このような城戸の問題意識は『教育心理学研究』の創刊号 (1953) の巻頭論文「学力の問題」にもよく現れている。

2 我が国の心理学史の著書として代表的なものである今田恵の『心理学史』(1962) では，城戸の『心理学史 (上)』の名前が言及されているが，その内容紹介は一切ない。そして本来取り上げるべき『現代心理学―その問題史的考察―』については紹介そのものもない。そこには今田の『心理学史』が心理学者とその研究の事実紹介に終始して，これらの心理学研究を批判的に論じるという視点がなく書かれていることと関係している。あるいは，最近出された佐藤達哉と溝口元の編著になる『通史・日本の心理学』(1997) も基本的には今田と同じような事実確認のための心理学の歴史研究である。そこには心理学研究への批判的な視点は全くない。歴史的事実をただ忠実に記述し，まとめることが心理学史であるという発想があるだけである。これらの心理学史からは研究の歴史の事実確認という資料的価値があるだけで，本来の歴史的研究の目的である，反省的思考を得ることは出来ない。佐藤達哉と溝口の中には城戸の名前は何度も出てくるが，そこでは城戸の学会活動を中心にして紹介しているだけで，城戸の心理学についての批判的精神については全くふれられていない。この著書の中では今田と同じように，城戸の『心理学史 (上)』については紹介されているが，『現代心理学―その問題史的考察―』の存在についても言及していない。今田のものを参考にした

からであろう。さらに，城戸の『心理学問題史』については言及されてはいるが，その紹介の仕方が西洋心理学導入の日本の心理学思想の解説を行ったものとなっており，全く内容を理解した上でのものとはなっていない。佐藤と溝口のものが日本の心理学の歴史を中心に書いたものであるとはいえ，城戸の『心理学問題史』の紹介としてははなはだ問題が多い。そもそも600ページ近い分量で，しかも通常の心理学研究の範囲をはるかに超えるような内容が書かれているものを短く紹介することは不可能である。

3 『心理学問題史』に関わる個人的経験を述べておきたい。この書との出会いは今から40年前のこの著書が刊行された数年後のことである。ちょうど筆者が北海道教育大学の学生であった時，4回程にわたって私たち学生に「城戸先生が講義をしたい」からということでまさに「集められ」，話を聞く機会があった。もちろん，この時彼が話した内容はほとんど理解することは出来ず，講義の中に出てきたいくつかの研究者の名前とその研究の概要をまさに表面的，断片的に分かるのがせいぜいであった。この講義は途中で休み時間を取ることもなく3時間近くにわたるもので，しかも資料もなく，何の予備的知識もなく聞くという状態であった。だが，その時の驚きは今でも鮮明に思い出されるのだが，城戸はこの時既に70歳をはるかに超えた年齢になっていたが，メモの類を一切持たずに長時間にわたってよどみなく話をしていたのである。彼にとってはこの一連の講義で取り上げた内容は全て自分の思想となっていたのでこのようなことが可能になっていたのだろうが，それでも，この超人的な記憶力とその論理の力は並大抵のものではないことに驚かされ，強く印象づけられたのである。今もこのことは鮮明に憶えている。それだけ強烈な印象だったのである。この時に城戸が講義した内容はまさにこの『心理学問題史』のことであった。この『心理学問題史』にはその内容を容易に理解させないものがあった。だが，理解したいという気持ちだけはずっと持ち続けてきた。いわば私の課題であった。同じ心理学者として彼が言っていること，その問題の本質を理解したいという気持ちだけは持ってきた。少し分かるようになってきたのは，心理学の思想とその問題圏を心理学という狭い枠でみることを止めること，そして心理学の思想を批判的にみることの重要性に気付き始めた頃からである。それはまさに城戸自身の思想的営為そのものであったといえるかもしれない。

4 ヴィゴツキーの考えをスピノザ思想の影響で説明しようとする動きがある（例えば，神谷栄司『未完のヴィゴツキー理論―甦る心理学のスピノザ』あるいは心理学者の一部）が，スピノザの影響を過度に強調するのは間違いである。たしかにヴィゴツキーの情動理論は観念的情動論を身体論から突破しようとしてスピノザ心身論を使っているし，スピノザと同様に意識に過剰な価値を与えることにも注意をしながら，同時に心身の関係を弁証法的に捉えたところは多分にスピノザ的であることは間違いない。そもそもスピノザの主張には心理学的真理が多数あって，スピノザを心理学者と読むことも出来るかもしれない。だが，スピノザ思想はいわば彼の内在性，自己原因性の考えを受け継いだカント以降のドイツ観念論者，例えばシェリングに代表される人たちの間では常識と言って良いほど広く広がっていたことを考えると，ヴィゴツキーが自己の理論形成に当たってスピノザのある特定の思想に影響を受けたとは断定出来ないだろう。実際，ヴィゴツキーがスピノザについて直接言及しているのはわずかであるし，仮にヴィゴツキーの中にスピノザの思想が大きく入り込んでいるとするならば，文献学的に検証すること，それが出来ることが前提である。ヴィゴツキーは人間精神をめぐる自己の理論を形成するに当たっては複数の思想をある意味では「良いとこ取り」しているところがある。例えば，フンボルト言語学ともつながりを持つロシア言語学のポテブニャ，バフチンの言語思想，シペートを介在したフッサール現象学，児童学運動のブロンスキー，ゲシュタルト心理学の発想，ドイツを中心にしたユクスキュールに代表されるような生物学思想，そしてマルクス主義等々。ある特定の人間の思想に影響を受けたという発想は取らない方がよい。

5 フィヒテの「事行概念」とその思想については，木村素衛の表現行為論と共に佐藤公治（2011）「表現行為としての精神と身体，その社会・歴史的意味」，北海道大学大学院教育学研究院紀要，第113号，109―147，及

び佐藤公治（2012）『音を創る，音を聴く―音楽の協同的生成』（新曜社）の第2章2節でその概略を述べている。

6　城戸が『心理学問題史』の中で言及しているドイツを中心とした心理学研究で，小論において北海道大学教育学部内の城戸幡太郎文庫に収められていると述べておいたものについては実際にその所在を確認している。城戸が詳しく述べているF.A.カルス，C.G.カルス，ベネケなどの著書を実際に手にしてみると，城戸が鉛筆でマークを付けたり，アンダーラインを引いている箇所が何カ所もあり，詳しく内容を検討している様子がよく分かる。いかに城戸が膨大な書物と格闘していたかが思い知らされる。本に残された書き込みはまさにその人の活動と生活の痕跡である。ベネケのこの『自然科学としての心理学教本』を見ていて，偶然この本に昭和33年8月8日東京508便の航空券が挟んであるのを見つけた。飛行機の中でこの本を読んでいたのであろうその姿が浮かんでくる。

7　ここでは文章の分かりやすさを優先して岩波版のものを使う。「人間は自分に備わった理性によって，一つの社会のうちで同じ人間たちとともに生活するように，そしてその社会のうちで技術と科学によって自分を洗練化〔文化化〕し，文明化〔市民化〕し，道徳化するように使命づけられているのであって，人間が幸福と呼んでいる安楽と逸楽に向かう刺激に受動的に〔情熱的に〕耽ってしまうという動物的な性向がどんなにはなはだしくても，むしろ能動的に，つまり人間の本性の未開状態からして人間に絡みついているこうした困難と戦いながら自分を人間性に値するよう形成する，という使命を与えられているのである。」（邦訳317ページ）。この後も次のように言う。「人類の幸福を創造するのは人類自身であるべきだし，またそれは可能である。ただし人類が幸福になることはわれわれが熟知している人類の自然素質からアプリオリに導かれるものではなく，単に経験と歴史から判断して，あらゆる〔人間関係のうえの〕利口ぶりを発揮したうえでさらに，人類が〔道徳的に〕より高次の善に向かって進歩することを諦めることなく，光輝く道徳的な規範例に導かれながら（各自，力の及ぶかぎり）この〔道徳的改善という〕目標に一歩でも近づいていこうという気持ちを促すためには，〔その前提条件として〕幸福の実現に期待することがどうしても欠かせない，といった意味で根拠がなくもない期待をこめて推論されるにすぎない。」（邦訳323―324ページ）。

文　献

Deleuze , G. 1968（a）*Différence et répétition*. Paris : Presses universitaires de France.　財津理（訳）1992　差異と反復　河出書房新社.

Deleuze , G.　1968（b）*Spinoza et le problème de l'expression*. Paris : Éditions de Minuit.　工藤喜作・小柴康子,・小谷晴勇（訳）1991　スピノザと表現の問題　法政大学出版局.

Foucault, M. 1961　*Introduction à l'Anthropologie de Kant.* Paris: Librairie philosophique J. Vrin.　王寺賢太（訳）2010　カントの人間学　新潮社.

今田　恵　　1962　心理学史　岩波書店.

神谷栄司　2010　未完のヴィゴツキー理論―甦る心理学のスピノザ　三学出版.

Kant, I. 1781, 1787　*Kritik der reinen Vernunft, 1.Aufl., 2.Aufl.*　熊野純彦（訳）2012　純粋理性批判　作品社.

Kant, I. 1798　*Anthropologie in pragmatischer Hinsicht.* Herausgeber: Oswald Kulpe. 渋谷治美・高橋克也（訳）2003　実用的見地における人間学　カント全集１５：人間学・所収　岩波書店.

城戸幡太郎　1925　文化と個性と教育　文教書院.

城戸幡太郎　1926　心理学の問題　岩波書店.

城戸幡太郎　1932（a）　現代心理学の主要問題　同文書院.

城戸幡太郎　1932（b）　哲学的人間学 岩波講座・哲学16（体系的研究―社会と歴史の問題）・所収　岩波書店.

城戸幡太郎　1934　表現学序説　国語表現学（国語科学講座第9巻）・所収　明治書院.

城戸幡太郎　1935　国語表現学　賢文堂.

城戸幡太郎　1936（a）　心理学史（上）　日本評論社.

城戸幡太郎　1936（b）　国語表現学　国語教育の学的機構（岩波講座・国語教育第2巻）・所収　岩波書店.

城戸幡太郎　1937　国語表現学概説（師範大学講座・国語教育第9巻）　建文館.

城戸幡太郎　1950（a）　北大教育学部の構想　北海教育評論，3巻7号，12－13.

城戸幡太郎　1950（b）　現代心理学―その問題史的考察―　評論社.

城戸幡太郎　1953　学力の問題　教育心理学研究，第1巻第1号，1－8.

城戸幡太郎　1958　心理学と教育　国土社.

城戸幡太郎　1959（a）　文化心理学の方法論―意味の座標転換について―　中央大学文学部紀要，哲学科，第6号，1－27.

城戸幡太郎　1959（b）　教科の教育心理学的研究の問題と方法　教育心理学研究，第6巻第3号，57－62.

城戸幡太郎　1961　教育心理学における文化の問題　教育心理学研究，第9巻第1号，57－62.

城戸幡太郎　1964　教科としての教育心理学の研究法について―特に教育の研究と教員の養成の問題として―　教育心理学研究，第12巻第4号，21－27.

城戸幡太郎　1968（a）　心理学問題史　岩波書店.

城戸幡太郎　1968（b）　阿倍三郎先生古稀記念論文集編集委員会　現代心理学論集：阿倍三郎先生古稀記念論文集　明星大学文学部心理学研究室.

城戸幡太郎　1970　文化心理学の探究　国土社.

城戸幡太郎　1981　教育心理学への期待と反省　教育出版.

Merleau-Ponty, M. 1942 *La structure du comportement.* Paris : Presses Universitaires de France.　滝浦静雄・木田元（訳）1964　行動の構造　みすず書房.

小田部胤久　2001　芸術の逆説―近代美学の成立―　東京大学出版会.

小田部胤久　2007　ヴォルフとドイツ啓蒙主義の暁　加藤尚武（編）哲学の歴史・第7巻：理性の劇場・所収　中央公論新社.

佐藤公治　2011　表現行為としての精神と身体，その社会・歴史的意味　北海道大学大学院教育学研究院紀要，第113号，109－147.

佐藤公治　2012　音を創る，音を聴く―音楽の協同的生成　新曜社.

佐藤達哉・溝口元（編著）　1997　通史・日本の心理学　北大路書房.

Vygotsky, L.S. 1927　心理学の危機の歴史的意味　柴田義松（訳）1987　心理学の危機・所収　明治図書.

Psychological Studies of Mantaro Kido and his World of Thoughts

Kimiharu SATO

Summary

In this article Kido's psychological studies and his world of thoughts are discussed though his books about the historical study of psychology. He consistently argued that psychology has to be an interdisciplinary subject, in order to provide a total understanding of the human mind and human activities in everyday life. Kido's book "The History of problems in psychological studies" has traced the history of psychology and research methods from the ancient to the modern age. In the book, he has stated that integrated research with scientific methods and philosophical ideas of the human mind are needed in psychology. Kido's psychological studies were characterized by emphasis on the significance of the cultural context of human activities, and the significance of educational outreach for the development of human nature. The theoretical background of his psychological studies and ideas were partly derived from Kant's anthropological studies.

Key words

History of psychological study, philosophical anthropology, Kant's practical anthropology, appropriation of cultural meaning